

令和4年度指定

**WWL（ワールド・ワイド・ラーニング）コンソーシアム
構築支援事業
（個別最適な学習環境の構築に向けた研究開発事業）**

実施報告書・第2年次（令和5年度）

事業名

持続可能な国際社会を創る人材育成のためのオンライン先取り履修システムの構築

令和6年3月

国立大学法人 筑波大学
附属学校教育局

はじめに

筑波大学附属学校教育局（管理機関：以下、附属学校教育局）は、筑波大学附属坂戸高等学校を拠点校として令和元年度～令和３年度に WWL コンソーシアム構築支援事業に取り組んでまいりました。本事業では、拠点校のほか、国内８校と海外５校を連携校とし 10 の協働機関と AL ネットワーク（Advanced Learning ネットワーク：高等学校等と国内外の大学、企業、国際機関等が協働し、テーマを通じた高校生国際会議の開催等、高校生へ高度な学びを提供する仕組み）を編成し、テーマ「国際フィールドワークを通じて持続可能な国際社会を創る人材育成システムの構築」のもと、イノベティブなグローバル人材の育成を目指して、高校生国際会議の開催や国内外の大学・企業・国際機関等との協働により、新しいカリキュラムの開発に取り組みました。

しかし、令和元年度末からは、COVID-19 感染拡大の影響で、拠点校や連携校においても様々な活動が制限されることとなり、オンラインを活用した国際会議の開催や海外フィールドワークの国内への変更など当初の計画を見直しながら、事業を推進し、カリキュラム開発を進めました。

以上の取り組みにつきましては、筑波大学附属学校教育局「WWL（ワールド・ワイド・ラーニング）コンソーシアム構築支援事業」のホームページをご参照頂ければと存じます。

(<https://www.gakko.otsuka.tsukuba.ac.jp/wwl/>)

附属学校教育局では、このような令和３年度までの WWL 事業の成果を踏まえ、令和４年度からは、個別最適な学習環境構築を目指した「持続可能な国際社会を創る人材育成のためのオンライン先取り履修システムの構築」をテーマとした研究開発を開始しました。

本事業の特徴は、筑波大学が幹事校として構築を進めてきたオンライン国際教育プラットフォーム JV-Campus を活用して、コンテンツの発信を行う点にあります。JV-Campus により、WWL 事業で構築したカリキュラムを構成する高大連携コンテンツや筑波大学が保有する様々なコンテンツを、筑波大学を「提供校」として AL ネットワーク等を通じて「被提供校」へ広く発信し、各校の高校生にオンラインで提供することができます。また、将来的には、多くの WWL・SGH 連携校や海外校・東南アジア教育大臣機構（SEAMEO）スクールネットワーク校にコンテンツを提供し、「つくば型 WWL コンソーシアム」（仮称）を構築して、前例のない質の高い教育実践を目指していきます。このように、持続可能な国際社会を創る人材育成にとって必要不可欠な課題解決型学習のオンライン提供による国内外の高校生の個別最適な学習環境の構築および、大学教育の先取り履修に資するシステムの研究開発を本構想の目標としています。

事業２年目になる本年度は、提供する学習コンテンツの選定とともに、試行的な聴講プログラムを実施して被提供校の高校生の参加を進め、先取り履修システムの制度設計を中心に事業活動を行いましたので、ご報告いたします。

目 次

第1部 事業の概要	3
1. 構想計画書（概要）	4
2. 構想概要図	5
3. 令和5年度 事業計画書	6
4. 令和5年度 事業完了報告書	11
第2部 実施報告	21
1. 個別最適な学習プログラムの構成および提供コンテンツの検討	22
2. JV-Campus への「WWL 附属学校教育局 Box」の設置と管理	30
3. 個別最適な学習プログラム・コンテンツの提供と効果の検証	32
4. 「被提供校」との連絡調整と教員研修体制の構築	43
5. 先取り履修・単位修得システムの構築	45

第 1 部 事業の概要

1. 構想計画書（概要）

期間	ふりがな	こくりつだいがくほうじん つくばだいがく		都道府県名
令和4年度 ～ 令和6年度	実施機関	国立大学法人 筑波大学		いばらきけん
	ふりがな	つくばだいがく		茨城県
	提供校	筑波大学		

1.

**令和4年度WWL（ワールド・ワイド・ラーニング）コンソーシアム構築支援事業
個別最適な学習環境の構築に向けた研究開発事業 構想計画書（概要）**

構想名（30字程度）
持続可能な国際社会を創る人材育成のためのオンライン先取り履修システムの構築

構想概要（400字以内）
 本学が開発した国際的オンライン教育プラットフォーム（JV-Campus）を活用して、国内外の高校生向けの先取り履修システムを構築することによって、課題解決型学習への興味・関心の喚起と先取り履修・単位修得を実現し、優秀な学生の大学早期卒業を可能とし、持続可能な国際社会の創成に向けて活躍できる人材の育成に資することを目的とする。
 本学と附属坂戸高等学校（拠点校）が、WWL事業「国際フィールドワークを通じて持続可能な国際社会を創る人材育成システムの構築」で開発した学習コンテンツや本学「学士基盤科目」、地球規模課題学位プログラム、生物資源学類等から提供された課題解決型のコンテンツを、本学附属学校を中心としたALネットワーク校や将来的にはWWL・SGH連携校や海外校・東南アジア教育大臣機構スクールネットワーク校に提供し、「つくば型WWLコンソーシアム」（仮称）として質の高い教育実践を実現する。

研究開発・実施体制

研究方法 ※複数選択可	☐ ①オンデマンド配信による学習機会の創出 ☐ ②オンライン授業による学習機会の創出 ☒ ③大学教育の先取り履修に資するコンテンツによる学びの提供					
実施機関	筑波大学附属学校教育局					
提供校	学校名	筑波大学			（国立）公立・私立	
	科目・講座名	海外フィールドワーク入門、学士基盤科目、BPGI科目 等			配信 予定回数 約 50 回	
被提供校	①	学校名	筑波大学附属坂戸高等学校			（国立）公立・私立
		対象生徒数	473 名	教育課程	内のみ・ <u>内外含む</u> ・外のみ	特例活用の有無 （有）・無
	②	学校名	筑波大学附属高等学校			（国立）公立・私立
		対象生徒数	730 名	教育課程	内のみ・ <u>内外含む</u> ・外のみ	特例活用の有無 （有）・無
	③	学校名	筑波大学附属駒場高等学校			（国立）公立・私立
		対象生徒数	490 名	教育課程	内のみ・ <u>内外含む</u> ・外のみ	特例活用の有無 （有）・無
	④	学校名	お茶の水女子大学附属高等学校			（国立）公立・私立
		対象生徒数	368 名	教育課程	内のみ・ <u>内外含む</u> ・外のみ	特例活用の有無 （有）・無
	⑤	学校名	東京学芸大学附属国際中等教育学校			（国立）公立・私立
		対象生徒数	365 名	教育課程	内のみ・ <u>内外含む</u> ・外のみ	特例活用の有無 （有）・無

※校数に応じて適宜表を追加すること（複数頁可）

WWL (ワールド・ワイド・ラーニング) コンソーシアム構築支援事業 ～個別最適な学習環境の構築に向けた研究開発事業 (筑波大学附属学校教育局)～

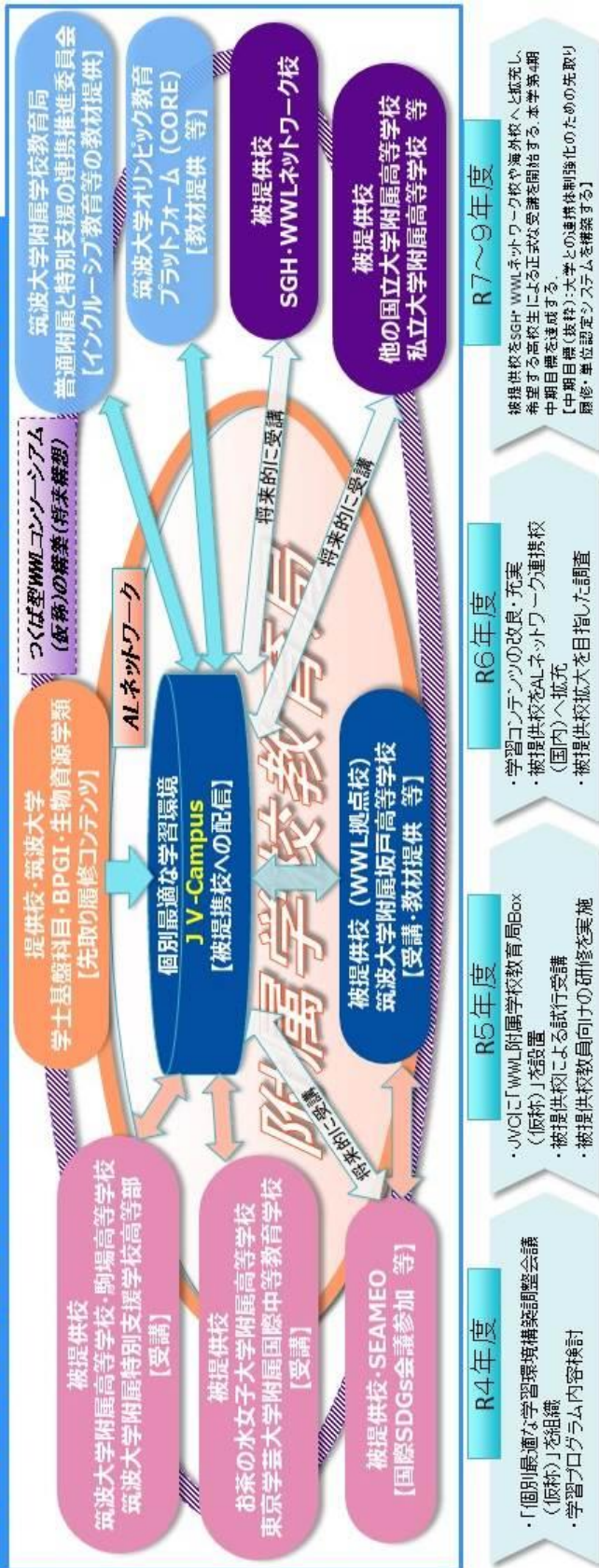
事業目的

本学が開発した国際的オンライン教育プラットフォーム「JV-Campus (Japan Virtual Campus)」を活用して、国内外の高校生向けの先取り履修システムを構築することによって、多くの高校生の課題解決型学習への興味・関心の喚起と先取り履修・単位修得を実現し、優秀な学生の大学早期卒業を可能とし、持続可能な国際社会の創成に向けて活躍できる人材の育成に資することを目的とする。

具体的な取組としては、本学と附属坂戸高等学校 (令和元年度～3年度WWL事業採択・拠点校) が取組んだ「国際フィードバックを通して持続可能な国際社会を創る人材育成システムの構築」において開発した学習コンテンツや筑波大学生物資源学類、地球規模課題学位プログラム (BPG) 等から提供を受けた課題解決型のコンテンツを本学附属高等学校を中心としたALネットワーク連携校 (国内8校) をはじめ、将来的にはWWL・SGH連携校や海外校・東南アジア教育大臣機構 (SEAMEO) スクールネットワーク (※) に提供し、「つくば型WWLコンソーシアム (仮称)」の構築」を実現し、前例のない、質の高い教育実践を可能とするものである。

※ 東南アジア教育大臣機構 (SEAMEO) スクールネットワークとは、世界中の教育機関のネットワークとパートナーシップの発展させることを目的として設立され、ASEAN諸国を中心に約2,600機関が加盟しているプロジェクト。附属坂戸高等学校は日本の高等学校で唯一の加盟校であり、これまでもWWL拠点校として、海外校との情報共有や高校生SDGs国際会議への参加等、緊密に連携を図っている。

事業内容：持続可能な国際社会を創る人材育成のためのオンライン先取り履修システムの構築



3. 令和5年度 事業計画書

様式第1 (事業計画書)

事業計画書

令和5年2月13日

支出負担行為担当官

文部科学省初等中等教育局長 殿

(実施機関名) 住 所 茨城県つくば市天王台一丁目1番1

名称及び 国立大学法人筑波大学

代表者名 学長 永田 恭介

(公印省略)

I 委託事業の内容

1. 事業名

WWL (ワールド・ワイド・ラーニング) コンソーシアム構築支援事業

(個別最適な学習環境の構築に向けた研究開発事業)

持続可能な国際社会を創る人材育成のためのオンライン先取り履修システムの構築

2. 事業の目的

本学が開発した国際的オンライン教育プラットフォーム「JV-Campus (Japan Virtual Campus)」を活用して、国内外の高校生向けの先取り履修システムを構築することによって、多くの高校生の課題解決型学習への興味・関心の喚起と先取り履修・単位修得を実現し、優秀な学生の大学早期卒業を可能とし、持続可能な国際社会の創成に向けて活躍できる人材の育成に資することを目的とする。

具体的な取組としては、本学と附属坂戸高等学校 (令和元年度～3年度 WWL 事業採択：拠点校) が取組んだ「国際フィールドワークを通じて持続可能な国際社会を創る人材育成システムの構築」において開発した学習コンテンツや筑波大学生物資源学類、地球規模課題学位プログラム (BPGI) 等から提供を受けた課題解決型のコンテンツを本学附属高等学校を中心とした AL ネットワーク連携校 (国内 8 校) をはじめ、将来的には WWL・SGH 連携校や海外校・東南アジア教育大臣機構 (SEAMEO) スクールネットワーク校に提供し、「つくば型 WWL コンソーシアム (仮称) の構築」を実現し、前例のない質の高い教育実践を可能とするものである。

3. 調査研究の方法 ※複数選択可、具体的な内容については公募要領に記載

☐ ①オンデマンド配信による学習機会の創出

☐ ②オンライン授業による学習機会の創出

☒ ③大学教育の先取り履修に資するコンテンツによる学びの提供

4. 事業の実施期間

委託を受けた日から 令和6年3月31日

5. 事業の方法

(1) 研究開発期間における目標

短期的な目標としては、提供するコンテンツを吟味し、学習プログラムを構築するとともに、オンライン先取り履修システムの構築に向け、本構想における大学の単位が付与できる「科目等履修生」の受入体制を整備することを目指す。「被提供校」においては、個別最適な学習環境の調整と受講の支援体制を整えることを目指す。

具体的には、「個別最適な学習環境構築推進会議」を組織し、提供するコンテンツの基準を作成し、本構想に適した学習プログラムを構築する。附属学校教育局においては、JV-Campus 内に「WWL 附属学校教育局 Box」を設置し、大学等から提供されたコンテンツを管理・発信する。

「被提供校」においては、個別最適な学習環境の調整と受講の支援体制を整え、試行的な受講とその評価を行う。併せて、オンライン先取り履修システムの構築に向け、本構想における「科目等履修生」受入体制の整備を行う。

さらに、研究開発期間の終了後においても、試行期間の検証・評価により、学習プログラムや提供コンテンツの充実を図るとともに、「被提供校」を AL ネットワーク連携校に拡張し、「つくば型 WWL コンソーシアム」（仮称）の構築を目指す。また、オンライン先取り履修システムを運用し、高校生による科目等の履修と単位修得の実現を目指す。

(2) (1) の実施に向けた工程・スケジュール

採択2年目となる令和5年度では、附属学校教育局は、JV-Campus に「WWL 附属学校教育局 Box」を設置し、コンテンツの提供を開始する。附属坂戸高等学校、附属高等学校、附属駒場高等学校、お茶の水女子大学附属高等学校、東京学芸大学附属国際中等教育学校を「被提供校」として、個別最適な学習環境を整え、試行的な受講を開始する。その際、「被提供校」の教員向けに、生徒の受講を支援するための研修を実施する。

3年目に予定する、AL ネットワーク連携校（国内）へのコンテンツの発信に向けて、各校への調査を行う。

(3) 令和5年度の実施内容

事業の目的を達成するため、令和5年度は、本学・JV-Campus・附属学校教育局・附属学校の教職員で構成する「個別最適な学習環境構築推進会議」（以下「推進会議」）により、コンテンツ配信および被提供校における受講に向け、以下の検討を進め、実施する。

① 個別最適な学習プログラムの構成および提供コンテンツの検討

- ・持続可能な国際社会を創る人材育成に資する観点に基づくものとなるよう、配信する学習プログラムの構成や提供するコンテンツの内容の選定を進める。
- ・提供校（本学）において、「推進会議」が選定したコンテンツの新規作成や既存コンテンツのブラッシュアップを実施する。

② JV-Campus への「WWL 附属学校教育局 Box」の設置と管理

- ・JV-Campus 担当者と連携して「WWL 附属学校教育局 Box」を設置し、運用を開始する。

③ 個別最適な学習プログラム・コンテンツの提供と効果の検証

- ・個別最適な学習プログラムに基づくコンテンツの「被提供校」への試行的な提供を開始す

る。また、学習プログラムやコンテンツの内容や、「被提供校」での受講・活用の方法等について「評価委員会」による評価を受ける。

④ 「被提供校」との連絡調整と教員研修体制の構築

- ・「被提供校」における学習ニーズの調査および受講に向けた教員の研修を行う。

⑤ 先取り履修・単位修得システムの構築

- ・オンラインによる単位先取り履修システムの構築に向け、大学関係機関と調整を図り、「科目等履修生」の運用開始を目指す。

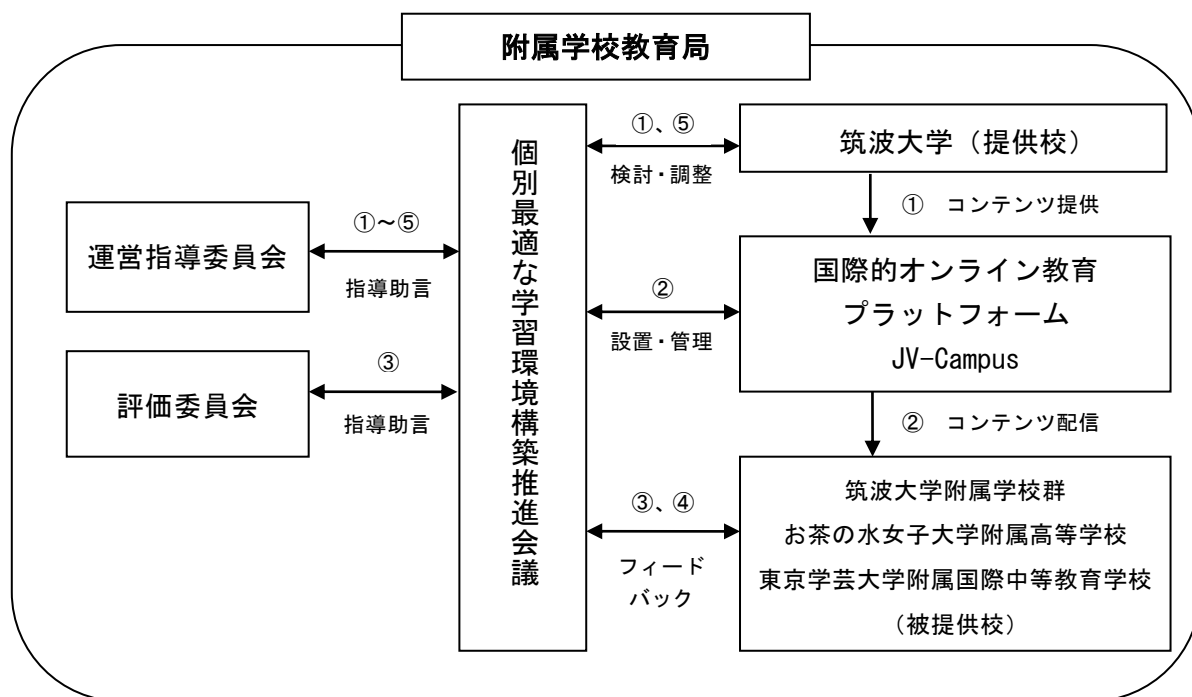
以上の事業について専門的見地から指導・助言に当たる「運営指導委員会」と事業内容を評価・検証する「評価委員会」を設置した。「運営指導委員会」においては「推進会議」が作成した令和5年度の実施計画における課題解決に向けた指導・助言を行い、「評価委員会」においては「推進会議」が作成した令和5年度の実施計画に基づくコンテンツ提供等による被提供校での効果測定やフィードバックの方法等について指導・助言を行う。

さらに、「推進会議」メンバーによる事業先進校（地域 AL 拠点機関等）への訪問調査・連携交渉を実施し、その結果を令和5年度の事業に反映させるとともに、WWL 管理機関として事業先進校（地域 AL 拠点機関）との連携を深める。また、オンラインコンテンツの海外配信の実現に向けて、東南アジア教育大臣機構（SEAMEO）関係者との調整を行う。

6. 業務実施体制（体制図の添付必須）

業 務 項 目	実 施 場 所	担 当 責 任 者
① 個別最適な学習プログラムの構成および提供コンテンツの検討	附属学校教育局 筑波大学 被提供校	梶山 正明（附属学校教育局教育長補佐） 久保 尊洋（附属学校教育局特任助教）
② JV-Campus への「WWL 附属学校教育局 Box」の設置と管理	筑波大学 附属学校教育局	久保 尊洋（附属学校教育局特任助教） 梶山 正明（附属学校教育局教育長補佐）
③ 個別最適な学習プログラム・コンテンツの提供と効果の検証	筑波大学 附属学校教育局	飯田 順子（附属学校教育局准教授） 梶山 正明（附属学校教育局教育長補佐）
④ 「被提供校」との連絡調整と教員研修体制の構築	被提供校 附属学校教育局	雷坂 浩之（附属学校教育局次長） 木村 範子（附属学校教育局講師）
⑤ 先取り履修・単位修得システムの構築	筑波大学 附属学校教育局	梶山 正明（附属学校教育局教育長補佐） 久保 尊洋（附属学校教育局特任助教）

業務実施体制図



7. 事業項目別実施期間

※ 事業計画書作成時のものであり、事業着手は契約締結後に行うものとする。

事業項目	実施期間（委託を受けた日 ～ 令和6年3月31日）											
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
① 個別最適な学習プログラムの構成および提供コンテンツの検討（推進会議）	—		○	—			○	—		○	—	→
② JV-Campus への「WWL 附属学校教育局 Box」の設置と管理	—											→
③ 個別最適な学習プログラム・コンテンツの提供と効果の検証（運営指導委員会、評価委員会）				○							○	
④ 「被提供校」との連絡調整と教員研修体制の構築	—											→
⑤ 先取り履修・単位修得システムの構築	—											→

8. 再委託に関する事項

再委託の相手方の住所及び氏名	
(連絡先)	
再委託を行う業務の範囲	
事業の目的及び内容	
事業の方法	
事業の内訳	
再委託の必要性	
再委託金額（単位：円）	
	円

II 委託事業経費 様式第 1－1 に記載

再委託費内訳 様式第 1－2 に記載

III その他

1. 経理担当者（責任者及び事務担当者）

氏 名	役 職 名（Eメールアドレス）	電話番号	FAX 番号
（責任者） 久米 弘行	東京キャンパス事務部企画推進課長 (kikaku-kokusai@un.tsukuba.ac.jp)	03-3942-6803	03-3942-6820
（事務担当者） 齋藤 貴大	東京キャンパス事務部企画推進課 教育振興・国際担当 一般職員 (saito.takahiro.fu@un.tsukuba.ac.jp)	03-3942-6432	03-3942-6820

（注）・責任者は、本委託事業に係る経理責任者（必ず記入すること）
 ・事務担当者は、実際に当省委託担当課（室）との窓口となる者（必ず記入すること）

4. 令和5年度 事業完了報告書

様式第4（別紙イ）

事業結果説明書

1. 事業の実績

(1) 事業の実施日程

事業項目	実施期間（委託を受けた日 ～ 令和6年3月31日）											
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
① 個別最適な学習プログラムの構成および提供コンテンツの検討（推進会議）	—		○				○			○		→
② JV-Campus への「WWL 附属学校教育局 Box」の設置と管理	—											→
③ 個別最適な学習プログラム・コンテンツの提供と効果の検証（運営指導委員会、評価委員会）				○	○						○	
④ 「被提供校」との連絡調整と教員研修体制の構築	—											→
⑤ 先取り履修・単位修得システムの構築	—											→

(2) 事業の実績の説明

【実施体制の整備】

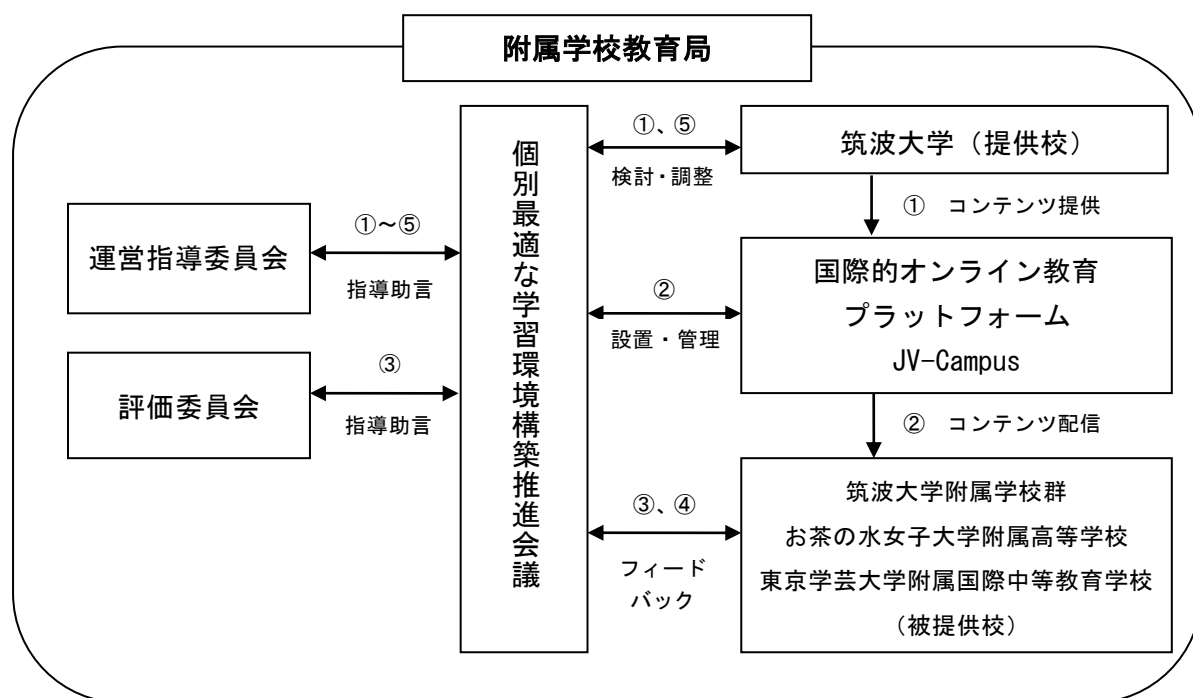
研究開発・実践の組織的な整備状況

個別最適な学習環境構築推進事業における事業項目①～⑤を円滑に遂行するため、以下のように担当者を配置し、組織を整備した。

- ・ 呑海 沙織 副学長・附属学校教育局教育長 事業の総責任者
- ・ 雷坂 浩之 附属学校教育局次長（教授） 事業（④）の立案と運営の統括
- ・ 尾白 泰次 附属学校教育局次長（事務） 事務の統括
- ・ 梶山 正明 附属学校教育局教育長補佐（教授） 事業（①②③⑤）の立案と運営の統括
- ・ 飯田 順子 附属学校教育局准教授 事業（③）の立案と運営の統括

- ・木村 範子 附属学校教育局講師 事業（④）の立案と運営の統括
- ・田中 裕子 附属学校教育局特任助教 事業（①②⑤）の立案と運営の統括
- ・中川 一弘 東京キャンパス事務部企画推進課長 事務の統括
- ・中島 治 東京キャンパス事務部企画推進課専門員 事務の副統括

業務実施体制図



【事業の実績】

令和5年度事業計画書 5. 事業方法 (2) (1) の実施に向けた工程・スケジュール に従って事業を実施した。

採択2年目となる令和5年度では、附属学校教育局は、JV-Campus に「WWL 附属学校教育局 Box」を設置し、コンテンツの提供を開始する。附属坂戸高等学校、附属高等学校、附属駒場高等学校、お茶の水女子大学附属高等学校、東京学芸大学附属国際中等教育学校を「被提供校」*1 として、個別最適な学習環境を整え、試行的な受講を開始する。その際、「被提供校」の教員向けに、生徒の受講を支援するための研修を実施する。

3年目に予定する、AL ネットワーク連携校（国内）へのコンテンツの発信に向けて、各校への調査を行う*2。

*1 上記5校に加え、附属視覚特別支援学校高等部、附属聴覚特別支援学校高等部、附属桐が丘特別支援学校（肢体不自由）高等部の3校を加えた8校を「被提供校」として事業を実施した。

*2 後述の「大学の学びの先取り履修システム」の運用開始を令和7年度としたため、AL ネットワーク連携校（国内）への調査は令和6年度以降に延期とした。

1. 事業の実績 (1) 事業の実施日程 に記載した事業項目①～⑤についての事業の実績を以下に報告する。

① 個別最適な学習プログラムの構成および提供コンテンツの検討（推進委員会）

個別最適な学習環境構築推進会議を設置し、以下の日程で会議を開催して、各議題について審議した。

第1回会議（令和5年6月8日（木）オンライン会議）

第2回会議（令和5年10月10日（火）オンライン会議）

第3回会議（令和6年1月23日（火）オンライン会議）

第1回会議（令和5年6月8日（木）オンライン会議）

議事次第

- (1) 令和5年度 筑波大学 WWL 事業 個別最適な学習環境構築推進会議について
- (2) 個別最適な学習環境構築推進事業の進捗について
- (3) 大学授業科目における先取り履修の候補科目について
- (4) 高校生を対象とした大学における科目等履修の事例について
- (5) 被提供校における生徒受講に向けた対応と今年度の配信予定授業について

議事要旨

新年度会議体の発足にあたり、前年度（令和4年度）の実施報告書に記載された5つの事業項目ごとに、これまでの経緯と進捗状況について報告を行い、提供する個別最適な学習プログラム・コンテンツと目指すべき先取り履修システムの方向性について、委員から意見の集約を行った。

続けて、先取り履修の候補にあがっている筑波大学の主な授業科目群について説明すると共に、本年度の夏期休暇期間に試行的に高校生の聴講を認める集中授業科目「平和と法」と「国際農業研修Ⅶ」について、授業科目担当教員より、科目のねらいと概要、高校生の参加方法が紹介された。

さらに、高校生を対象とした大学における科目等履修のこれまでの事例について、国内における関連法規改正の経緯、筑波大学の過去例、WWL 事業や他学における代表的なケース等、今後の制度設計において参考となる情報の共有を行った。

第2回会議（令和5年10月10日（火）オンライン会議）

議事次第

- (1) 推進会議構成員（オブザーバー）の追加について
- (2) 前回議事録（案）の確認
- (3) 個別最適な学習環境構築推進事業の進捗について
 - ・「大学の学びの先取り履修システム」の構築について
 - ・大学授業科目の先取り履修1～「平和と法」高校生参加報告
 - ・大学授業科目の先取り履修2～「国際農業研修Ⅶ」高校生参加報告
 - ・2023年度開講 筑波大学 専門導入科目（オンデマンド先取り履修科目の候補）
- (4) 被提供校の生徒の受講に向けたシステムの検討について

議事要旨

前回会議以降の本事業の進捗について報告を行った。「大学の学びの先取り履修システム」の構築にあたっては、筑波大学との間で必要な規則改訂と教学事項の協議・調整を進め、現行の科目等履修生制度の枠組みを活用する方向性を確認し、今後の制度設計の進め方と留意点について、委員間で質疑応答を行った。

続けて、夏期に高校生が聴講履修した集中授業科目「平和と法」「国際農業研修Ⅶ」について、授業科目担当教員より実施報告を行った。「平和と法」には被提供校の高校生 26 名および特別参加の中学生 3 名が参加し、高校生、大学生、大学院生が広範な社会分野のテーマについてディスカッションして深い学びを得たこと、「国際農業研修Ⅶ」では高校生 6 名が大学生とともにインドネシアの生態系と植林活動についての海外フィールド実習に参加し、英語をベースにした授業プログラムの成果発表、現地学生との活発な交流など得難い成果をあげたことが報告された。

さらに、先取り履修の候補にあがっている筑波大学のオンデマンド科目を中心とした「専門導入科目」群について、本年度の開設状況と、高校生が進路指針として受講する上での訴求メリットなど、有用な情報共有を行った。

第 3 回会議（令和 6 年 1 月 23 日（火）オンライン会議）

議事次第

- (1) 前回議事録（案）の確認
- (2) 個別最適な学習環境構築推進事業の進捗について
- (3) 「先取り履修」被提供校へのアンケート結果について
- (4) 今後の「先取り履修」授業科目の検討について

議事要旨

「大学の学びの先取り履修システム」について、現行の科目等履修生制度の枠組みを利用して設計すること、令和 6 年度中に関連規則改正と科目選定、高校への説明・募集を行い、7 年度からの制度開始を目指すなどの今後のスケジュールが報告され、委員間で新制度の独自性や JV-campus との連携の可能性などについて質疑応答を行った。

続けて、先取り履修システムに関して、被提供校 8 校から提出されたアンケート回答をもとに、意見の集約と検討を行った。アンケート項目は、高校カリキュラム内での位置づけ、制度への希望、授業の実施形態と活用方法、単位認定など多岐にわたり、特別支援学校からは情報保障の要望などがあげられ、今後の検討のポイントとなる情報交換を行った。

推進会議等における検討結果を踏まえ、個別最適な学習プログラムの構成については、現行の科目等履修生制度の枠組みを利用して「大学の学びの先取り履修システム」として設計する方針を固めた（⑤参照）。

また、提供コンテンツの検討については、夏期休暇期間に試行的に高校生の聴講を認めるオンデマンド+集中授業科目「平和と法」と「国際農業研修Ⅶ」について学内で調整を進め、実施することができた（③-1, 2 参照）。さらに、高校生を対象とした大学における科目等履修の事例について、国内における関連法規改正の経緯、筑波大学の過去例、WWL 事業や他学における代表的なケース等、今後の制度設計において参考となる情報を収集し検討を進めた。

令和 5 年度筑波大学 WWL コンソーシアム構築支援事業
個別最適な学習環境構築推進会議構成員名簿

令和 6 年 1 月 1 日現在

所属	職名	氏名	備考	業務項目
附属学校教育局	教育長	呑海 沙織	管理機関/事業統括者	○
附属学校教育局	次長(教員担当)	雷坂 浩之	管理機関	○
附属学校教育局	次長(事務担当)	尾白 泰次	管理機関/事業統括者	○
附属学校教育局	教育長補佐	梶山 正明	管理機関/事業推進者	○
附属学校教育局	准教授	飯田 順子	管理機関/成果検証	③
附属学校教育局	講師	木村 範子	管理機関/カリキュラム	①④
附属学校教育局	特任助教	田中 裕子	管理機関/事業推進者/海外交流アドバイザー	○
図書館情報メディア系	客員教授	溝上 智恵子	管理機関	①③⑤
国際局国際室	教授	森尾 貴広	JVキャンパス/個別最適な学習環境構築/国際ネットワーク	①②⑤
生命環境系 アドミッション・センター国際入試部門	准教授	野村 名可男	JVキャンパス/個別最適な学習環境構築/国際ネットワーク	①②⑤
筑波大学	特命教授	青木 三郎	国際ネットワーク	①③
教育開発国際協力研究センター	教授	磯田 正美	国際ネットワーク	①③
医学医療系	准教授	大庭 良介	JVキャンパス/個別最適な学習環境構築	①②⑤
人文社会系	助教	秋山 肇	国際ネットワーク	①③
附属坂戸高等学校	校長	江前 敏晴	被提供校/個別最適な学習環境構築	①③④
附属坂戸高等学校	副校長	深澤 孝之	被提供校/個別最適な学習環境構築	①③④
附属坂戸高等学校	主幹教諭	建元 喜寿	被提供校/国際ネットワーク	①③④
附属高等学校	副校長	小澤 啓	被提供校	①③
附属高等学校	教諭	中塚 義実	被提供校/オリパラ教育	①③
附属駒場高等学校	主幹教諭	宮崎 大輔	被提供校	①③
附属視覚特別支援学校	副校長	山口 崇	被提供校	①③
附属視覚特別支援学校	教諭	氣仙 有実子	被提供校・オブザーバー参加	①③
附属聴覚特別支援学校	副校長	眞田 進夫	被提供校	①③
附属桐が丘特別支援学校	副校長	田丸 秋穂	被提供校	①③
附属桐が丘特別支援学校	教諭	林 秀輝	被提供校・オブザーバー参加	①③
お茶の水女子大学附属高等学校	副校長	溝口 恵	被提供校	①③
お茶の水女子大学附属高等学校	高校教育研究推進委員会委員長	玉谷 直子	被提供校・オブザーバー参加	①③
東京学芸大学附属国際中等教育学校	副校長	雨宮 真一	被提供校	①③

事務組織

所属	職名	氏名	備考	業務項目
東京キャンパス事務部企画推進課	課長	中川 一弘	管理機関	○
東京キャンパス事務部企画推進課	専門員	中島 治	管理機関	○
東京キャンパス事務部企画推進課	係長	富岡 有子	管理機関	○

東京キャンパス事務部企画推進課	カリキュラムアドバイザー	見竹 三樹夫	管理機関	○
東京キャンパス事務部企画推進課	一般職員	大坪 仁美	管理機関	○
東京キャンパス事務部企画推進課	事務補佐員	高田 智子	管理機関	○
東京キャンパス事務部企画推進課	事務補佐員	山村 潤子	管理機関	○
東京キャンパス事務部企画推進課	事務補佐員	平田 理紗	管理機関	○

※ ○：業務項目①～⑤すべてを担当

② JV-Campus への「WWL 附属学校教育局 Box」の設置と管理

JV-Campus 担当者（グループリーダー）と調整を進め、令和 5 年度から JV-Campus 上に「WWL 附属学校教育局 Box」を設置することができた。さらに、後述の授業科目「平和と法」および「国際農業研修Ⅶ」のオンデマンド授業部分を「WWL 附属学校教育局 Box」に置き、JV-Campus 経由で高校生が受講した。

③ 個別最適な学習プログラム・コンテンツの提供と効果の検証（運営指導・評価委員会）

③－１ 社会・国際学群社会学類開講「平和と法」（秋山肇助教）の高校生による聴講

授業概要：法の視点を踏まえて平和の定義を検討し、さまざまな事例を取り上げながら平和を実現する方法を大学生、大学院生に混ざって高校生が参加して発表し議論する。

授業日程：7/15（土）オンライン（同時双方向、オンデマンド参加可能）

8/19（土）、8/20（日）、8/21（月）対面（筑波キャンパス、オンライン参加可能）

参加形式：聴講は、7/15 のオンライン授業（またはオンデマンド視聴）を受講した後、対面授業は可能な範囲で出席する。高校生もグループプレゼンテーションでの発表が可能。

聴講生は、社会学類長発行の聴講証明書を取得できる。

参加生徒：附属高等学校：2 名 附属駒場高等学校：1 名 附属坂戸高等学校：1 名

附属視覚特別支援学校高等部：6 名 東京学芸大学附属国際中等教育学校：12 名

お茶の水女子大学附属高等学校：4 名 附属駒場中学校：3 名 計 29 名

授業内容（テーマ）：

・第 1 回～第 4 回 7/15（オンライン）

イントロダクション：平和とはなにか、平和の分析枠組み：直接的暴力・構造的暴力・文化的暴力、社会における法の役割・国内法、国際法、平和におけるミュージアムの役割

・第 5 回～第 8 回 8/19（対面）

戦争・国際関係、難民・避難民、ジェンダー・セクシュアリティ、中心と周縁：沖縄、福島

・第 9 回～第 12 回 8/20（対面）

障害と医療、科学技術と平和、COVID-19 と平和、環境問題

・第 13 回～第 16 回 8/21（対面）

教育と平和、スポーツ・オリンピック、芸術と創造性

まとめのディスカッション：法はいかに平和を実現しうるか？

対面での授業では、あらかじめテーマごとに分担・班分けしたグループの大学院生・大学生・高校生が、全体の前で各テーマと平和に関わる調査内容や各個人の意見、ディスカッションクエストを発表した。次に、発表に関する質疑応答があり、グループ別の討議を経て、いくつかのグループからの発表やそれに対する授業担当者からのコメントがあった。

③－２ 生命環境学群生物資源学類開講「国際農業研修Ⅶ」(野村名可男准教授)への坂戸高校生徒の参加

授業概要：海外の農村における PBL（Problem Based Learning（問題解決学習））を通じた開発支援を目的とした国際援助の在り方について学修する。附属坂戸高校と協働で実施する。

授業日程：事前学修 7/1（土）～7/31（月）

海外研修：8/1（火）～8/11（金）

授業内容：準備講義 2 コマ（高大合同実施 1 コマ）

オンデマンド講義による講義（4 コマ・JV-Campus で公開）

- ① SDGs についての学修
- ② インドネシアにおける国立自然公園についての学修
- ③ インドネシアにおける自然生態系保護活動についての学修
- ④ APP による製紙産業の概要と CSR 活動についての学修

海外研修：8/1（火）～8/11（金）

ジャカルタ、ペカンバル、バンドン、ボゴール

参加学生・生徒：大学 8 名、附属坂戸高等学校 6 名

アジア最大級の製紙メーカーであるアジア・パルプ・アンド・ペーパー（APP）および、その日本法人であるエイピーピー・ジャパン株式会社と連携し、高大接続科目としての海外フィールドワークを実施した。研修の前半は、スマトラ島における APP の植林地の訪問、農村支援地域の視察、製紙工場、保護林、精英樹育種実験施設などを見学した。後半は、ジャワ島における実習を行い、おもに附属坂戸高等学校との姉妹校との交流を行った。APP の植林地における実習は、高校生、大学生ともに自己の消費生活の在り方と地球規模の課題をつなげて考えられる貴重な機会となった。

③－３ 運営指導委員会・評価委員会による効果の検証

運営指導委員会・評価委員会を設置し、以下の日程で会議を開催して、各議題について審議した。

第 1 回会議（令和 5 年 7 月 7 日（金）オンライン会議）

第 2 回会議（令和 6 年 2 月 20 日（火）オンライン会議）

第 1 回会議（令和 5 年 7 月 7 日（金）オンライン会議）

議事次第

- (1) 個別最適な学習環境の構築に向けた研究開発事業 運営指導委員会・評価委員会について

- (2) 個別最適な学習環境の構築に向けた研究開発事業 進捗について
- (3) 大学授業科目における先取り履修の候補科目について
- (4) 新たな高大接続のための科目等履修制度案について
- (5) 「早稲田大学 高校生特別聴講制度」のヒアリング報告

議事要旨

新年度にあたり、前年度（令和4年度）の実施報告書に記載された5つの事業項目について、これまでの経緯と進捗状況を報告、さらに先取り履修の候補にあがっている筑波大学の授業科目について説明すると共に、夏期に試行的に高校生が聴講を行う集中授業科目「平和と法」について、授業科目担当教員より、科目のねらいと概要が紹介された。両委員会の委員からは、本事業の取り組み内容への質問・講評に加え、高大接続の教育効果、大学研究室との連携、単位認定の考え方、他学での先行事例等、多岐にわたる意見・助言が寄せられた。

続けて、先取り履修システムとして検討している「筑波大学 高大接続科目等履修制度（案）」の概要と先行事例の早稲田大学「高校生特別聴講制度」へのヒアリング結果が説明され、引き続き、制度設計上の留意点、授業担当教員へのサポート体制など、委員と意見交換を行った。

第2回会議（令和6年2月20日（火）オンライン会議）

議事次第

- (1) 個別最適な学習環境の構築に向けた研究開発事業の進捗について
- (2) 大学授業科目の先取り履修 実施報告1～「平和と法」
大学授業科目の先取り履修 実施報告2～「国際農業研修Ⅶ」
- (3) 本年度事業に対する評価委員会 委員からの指導・助言
- (4) 「先取り履修」被提供校へのアンケート結果について
- (5) 本年度事業に対する運営指導委員会 委員からの指導・助言

議事要旨

本年度の事業活動について、評価委員および運営指導委員に対して、遂行状況を把握して頂くとともに、適切に指導・評価を受けるべく、進捗状況と試行的な取り組み成果の報告を行った。

進捗状況として、「大学の学びの先取り履修システム」を現行の科目等履修生制度の枠組みと既存開設科目を活用して設計し、令和6年度中に関連規則改正を行い、7年度からの制度開始を目指すなどの現時点の構想が報告された。さらに試行的な取り組みの成果として、夏期に高校生が聴講履修した集中授業科目「平和と法」「国際農業研修Ⅶ」について、各授業プログラムの内容と実施状況、参加した聴講高校生の学習成果と感想等について報告を行った。また、先取り履修の被提供校8校からの要望アンケートで集まった、主な意見についても説明を行った。

委員からは、試みの有効性への評価とともに、進路選択における高校時点の経験の重要性に鑑み、将来的には、より多様な生徒を対象を広げるべく助言が寄せられた。また、事業趣旨にある目的や将来構想に則して、明確なビジョンに基づく活動施策と結果説明が、評価の上で問われる等の貴重な指摘を受けた。

令和 5 年度筑波大学 WWL コンソーシアム構築支援事業
 (個別最適な学習環境の構築に向けた研究開発事業) 運営指導委員会・評価委員会

令和 6 年 1 月 1 日現在

委員会	区分	所属	役職名	氏名	委嘱期間	備考
運営指導委員会	委員	聖徳大学	教授	清水 一彦	令和 5 年 4 月 1 日～ 令和 6 年 3 月 3 1 日	継続
	委員	東京都市大学環境学部	教授	佐藤 真久	令和 5 年 4 月 1 日～ 令和 6 年 3 月 3 1 日	継続
	委員	名古屋大学大学院 教育発達科学研究科・教育学部	教授	柴田 好章	令和 5 年 4 月 1 日～ 令和 6 年 3 月 3 1 日	継続
	委員	東洋大学食環境科学部	教授	後藤 顕一	令和 5 年 4 月 1 日～ 令和 6 年 3 月 3 1 日	継続
	オブザーバー	筑波大学	副学長・理事 (国際担当)	池田 潤		
	オブザーバー	筑波大学	副学長・理事 (教育担当)	加藤 光保		
	オブザーバー	筑波大学	副学長 附属学校教育 局教育長	呑海 沙織		
	オブザーバー	筑波大学図書館情報メディア系	客員教授	溝上 智恵子		
	オブザーバー	筑波大学国際局国際室	教授	森尾 貴広		
	オブザーバー	筑波大学生命環境系	准教授	野村 名可男		
	オブザーバー	筑波大学	特命教授	青木 三郎		
	オブザーバー	筑波大学医学医療系	准教授	大庭 良介		
	オブザーバー	筑波大学人文社会系	助教	秋山 肇		
評価委員会	委員	埼玉学園大学人間学部	教授	大川 一郎	令和 5 年 4 月 1 日～ 令和 6 年 3 月 3 1 日	継続
	委員	放送大学教養学部	教授	岩崎 久美子	令和 5 年 4 月 1 日～ 令和 6 年 3 月 3 1 日	継続
	オブザーバー	筑波大学図書館情報メディア系	教授	鈴木 佳苗		
	オブザーバー	筑波大学図書館情報メディア系	助教	小野 永貴		
	オブザーバー	筑波大学附属学校教育局	准教授	飯田 順子		

(事業推進機関等)

附属学校教育局 次長 (教員担当)	雷 坂 浩 之
附属学校教育局 次長 (事務担当)	尾 白 泰 次
附属学校教育局 教育長補佐	梶 山 正 明
附属学校教育局 特任助教	田 中 裕 子
東京キャンパス事務部・企画推進課 (教育振興・国際担当)	

④ 「被提供校」との連絡調整と教員研修体制の構築

先取り履修システムの導入に向けて、被提供校 8 校に対して以下の 8 項目のアンケート調査を行い、提出された回答をもとに、意見の集約と実施に向けての検討を行った。

(アンケート項目)

- 問 1 「先取り履修」を、教科（通常の授業内の活動）として位置付けられる可能性はありますか。その場合、どのような方法が考えられますか。
- 問 2 「先取り履修」を、特別活動（総合的な探究の時間など）に位置付けられる可能性がありますか。その場合、どのような方法が考えられますか。
- 問 3 「先取り履修」を高校で進めるにあたっての要望事項をあげてください。
- 問 4 「先取り履修」は、2025 年度開始の予定です。実施に向けた検討スケジュールをご検討いただき、お答えください。
- 問 5 「先取り履修」の方法として、A や B 以外に考えられる方法などあればご提案ください。
A：長期休業中や土日開講の対面授業（筑波キャンパス）
B：すべてオンラインまたはオンデマンド授業
- 問 6 「先取り履修」を進めるにあたっての要望事項やアイデアなどありましたらお答えください。
- 問 7 大学の単位認定と高校の単位修得との関係について、考えをお答えください。
- 問 8 各校の高大接続（連携）についての基本的な考え方をまとめてください。

⑤ 先取り履修・単位修得システムの構築

「大学の学びの先取り履修システム」について、筑波大学における現行の科目等履修生制度の枠組みを利用して設計することを決定した。今後のスケジュールは、令和 6 年度中に関連規則改正と科目選定を行い、被提供校への先取り履修に関わる情報の周知と履修生の募集を進め、令和 7 年度からシステムの運用開始を目指す。

第2部 実施報告

1 個別最適な学習プログラムの構成および提供コンテンツの検討

(1) 令和4年度の検討状況

昨年度(令和4年度)の終わり近くに発足した本事業の推進会議や関係教員との打合せにおいて、まず先取り履修の対象となる学習コンテンツとして、大学からどのようなプログラムや授業科目を被提供校の高校生へ提供することができるか、端緒となる検討を始めた。

各附属学校から、制約せずに聴いた要望としては、医学系、生命環境系、芸術系など高校では受講することができない分野や、生徒の進路選択に資する広範な専門領域の授業科目、大学の実験室での活動まで、提供が実現すれば高い教育効果が生まれそうな学習コンテンツの候補案が、期待も含めて幅広く寄せられた。また、大学教員側からは、現実的に高校生が受講可能な大学の授業科目として、オンデマンドの授業科目や夏休みの時期を利用して参加する集中的な対面授業などが候補対象として提案された。

各附属学校から特に要望の多かった医学系コンテンツについて、医学系の研究室紹介と医学類授業科目のオンライン上の学習コンテンツを試験的に各校教員が視聴し、高校生が学習した場合に想定される理解度や課題、障害のある生徒への情報保障の方法などのフィードバック、検証を行った。

そして、高校生が受講できるオンデマンド授業科目として、筑波大学で開講されている主に初年次生を対象とした「学士基盤科目」群や「専門導入科目」群などが候補にあげられ、本年度(令和5年度)、具体的な検討を行うことを確認した。さらに、本年度の夏期に対面とオンラインで新たに開講予定の社会学類の集中授業科目「平和と法」について、同授業の担当教員から、試行的な形で高校生を参加させてはどうかという提案があり、聴講募集に向けて準備を進めることになった。

(2) 高校生を対象とした先取り履修コンテンツの調査

大学設置基準における科目等履修生制度の制定は平成3年、さらに学校教育法施行規則で高校における大学授業科目の学修の単位認定も平成10年に認められるなど法改正が行われ、平成11年に最初の「高大接続答申」として中央教育審議会より出された「初等中等教育と高等教育との接続の改善について(答申)」において「大学においては、特定分野で卓越した能力を持つ高校生に機会を提供するという視点にとどまらず、専門的な事項について強い意欲や関心を持つ生徒に高等教育機関が提供する多彩かつ多様な教育に触れる機会を広く提供するという視点が重要である。」と、高校生に大学授業科目を履修させることが推奨された。

すでに四半世紀も前に、こうした高大接続の明確な指針が出されていたにも関わらず、その後、わが国では高校生の科目等履修はあまり普及・定着してこなかった。しかし、「生きる力」「確かな学力」の育成を柱とした教育改革の大きな流れの中で、通常の授業科目の科目等履修を高校生に認める各大学での動きも広がりを見せている。

本年度、本事業の先取り履修の検討にあたり、主にインターネットによる調査になるが、取り組みの参考となりそうな他大学の科目等履修生制度の事例の調査を行った。そのうち本学が検討している取り組みに、最も近似性のあった早稲田大学の制度については、実際に同校を訪問してヒアリングを行った。高校生に提供するコンテンツの検討にあたって、参考にした他学の主な先行事例と着目は、次の通りである。

早稲田大学については、初年次生向けのオンデマンド科目を、オープンプラットフォームの学習管理システム上で開講している点など、本学が想定している先取り履修システムに最も近く、参考になると思われた。募集学部は、法、教育、文化構想、文学部、基礎教育を担当するグローバルエデュケーションセンターと幅広く、開講科目数も 40 科目と多い。7 割は数学と情報系の基礎的なオンデマンド科目で、その他、各学部で対面授業がそれぞれ数科目ずつ開講されている。オンデマンド授業でも一部教室で授業や試験を行う場合があり、対面授業の場合は高校生の通学に配慮し、土曜日や平日 5 時以降に開講される科目が選ばれている。

中央大学は、経済学部のみ募集で、「経済入門」1 科目のみ開講し、対面とオンライン履修のいずれかを選択できる。調査事例の中では、唯一入試上の優遇措置を設けており、2 年生以上で履修して、成績評価 A 以上を修めた場合、同大の「高大接続入試」の出願資格を得ることができる。

鹿児島大学は理学部のみ開講で、協定校の 2 年生以上を受け入れている。取組みの目的として、理学部への優秀な受験生の獲得を前面に掲げ、高校生が理解しやすいような理科教科の入門的なオンライン配信科目が用意されている。

山梨県立大学は、土日、夏期集中など高校生が受講しやすい日程で、アクティブラーニング、ワークショップ、フィールドワーク中心の特色科目を開講している。科目の性格上、大学の費用で科目等履修生を全員、学生教育研究災害傷害保険に加入させている。

大阪学院大学では、1 年生向けの教養科目を中心に開講し、修得した科目の入学後の単位認定は、G P A（Grade Point Average：評価平均）の評価ではなく、「認定した」という評価のみ付与している。

信州大学は、WWL 事業の一環として長野県内の高校生を対象としている。8 科目を対象として、受講形態は対面、オンライン（同時双方向型）、オンライン（オンデマンド型）など授業科目ごとに異なる。

広島大学も WWL の実施機関で、拠点校・連携校を中心とした西日本の高校生が対象。人文社会系、自然科学系、社会連携など 8 科目が用意され、夏休み期間の集中講義の形で実施されている。毎年延べ 100 名前後の生徒が参加し、7 割が単位を取得しているとのことである。単位認定上の留意事項があり、同大学の細則により、高校の授業科目として履修して、高校時点で単位認定された場合、大学では卒業単位認定しないという適用除外が設けられている。

愛媛大学は、広島大学とは反対に、高校と大学での二重単位の取得を前面に打ち出している。附属高校では、3 年生全員が「リベラル・アーツ」という名称の高校の正規科目として、愛媛大学の法学・経済学・数学・物理学・化学の入門科目から 1 科目を選び、木曜日の 1・2 時限目に履修する。

通信制の**放送大学**は、15 歳以上であれば、誰でも科目履修生として入学できる。「卒業研究」と「体育実技」以外、人文・社会・自然・産業など幅広い分野の約 300 ある開設科目から選択できる。

（３）令和５年度の推進会議における検討の進捗

６月に開催された第１回会議では、「（１）令和４年度の検討状況」にあるような、昨年度行われた提供コンテンツに関する検討について経緯の説明を行った。その際、各附属学校の教員がモニタ一的に視聴した医学系コンテンツの今後の利用について、研究室紹介コンテンツの方は高校の探究学習などで活用可能性があるのに対し、医学類の授業コンテンツの方は医師国家試験絡みで、科目等履修の対象にはなりづらい旨、医学医療系の教員より指摘があった。続けて、筑波大学の先取り履修の候補科目について、構想計画書にある目的や、高大カリキュラム接続と進路選択の観点と合わせ、候補にあがっている「学士基盤科目」と「専門導入科目」のオンライン・オンデマンド科目の特長を紹介した。さらに、高校生の試行的な聴講参加が予定されていた２つの夏期集中授業科目について、各科目担当教員より授業のねらいと概要の説明があった。１つはインドネシアで海外研修を行う生物資源学類の「国際農業研修Ⅶ」、もう１つは対面とオンラインを組み合わせた社会学類の「平和と法」で、両授業聴講への各附属学校からの参加者の見込みや、JV-campus の活用方法などについて確認を行った。

１０月に開催された第２回会議では、筑波大学が高校生向けに行う新たな科目等履修制度である「大学の学びの先取り履修システム」の進捗説明に際して、提供するコンテンツについては、基本的に大学の既存授業科目の形態を変えない方針が示された。続けて、夏期に高校生が聴講参加した「国際農業研修Ⅶ」と「平和と法」の２つの集中授業科目について、各科目担当教員より授業の実施状況と成果について報告があった。いずれの授業でも参加した各附属学校生徒が主体的かつ真摯に学習に取り組んで大きな学習成果が認められ、今後の活動を進める上での確証を得ることができた。さらに、有力な対象候補にあがっているオンデマンド科目を中心とした「専門導入科目」群について、科目の属性と開設状況、高大接続の観点から見た意義についての検討を行い、高校生の受講にあたり学年に応じた必要なレディネスについての意見交換等も行った。

１月に開催された第３回会議では、本年度に高校生が試行的に聴講した授業科目をブラッシュアップするとともに、その他に科目等履修できる授業科目の提案を引き続き行ってゆくことを確認した。また JV-Campus と連携して、対面授業科目をオンライン化して提供する方向性も、将来的に検討してゆくことが合わせて提案された。

最終的に提供するオンデマンド科目については、専門導入科目を中心に検討することになった。一方の学士基盤科目については、来年度、JV-Campus でのオンデマンド化を検討している「世界のTUKUBA で学ぶ」以外、コロナ禍以降は対面授業に戻り、高校生が受講可能な科目が限られることがわかった。専門導入科目は、基礎科目、専門科目などの通常の科目区分の範ちゅうとは別に、文字通り、専門分野の入り口となる科目として、１年次配当で全学対象に開設され、異なる分野を目指す学生でも履修できる。本年度の開講ベースで約 110 科目開講されており、そのうちオンラインのオンデマンド形式のものが 70 科目、対面型またはオンラインの同時双方向型のものが 27 科目、それ以外に理工系の学生のクラス指定された数学・物理・化学の基礎科目が 10 数科目ある。高大接続の観点からすると、様々な学問領域に理解を深めて高校生が進路決定の参考、指針、動機づけとする目的で、大学初年次生と同様、有効に活用できる。開設教育組織についても、筑波大学のほぼ全ての学類・専門学群にわたっており、科目の多寡はあるが、大体の分野をカバーしている。来年度以降、本稿の「（５）筑波大学 授業科目の先取り履修 候補対象授業科目」の一覧表にあるオンデマンド形式の専門導入科目を中心に、検討を進めてゆくことになった。

（４）個別最適な学習環境構築推進会議 議事内容

①第１回（令和５年６月８日（木）オンライン会議）

〔議事次第〕

- 1) 令和５年度 筑波大学 WWL 事業 個別最適な学習環境構築推進会議について
- 2) 個別最適な学習環境構築推進事業の進捗について
- 3) 大学授業科目における先取り履修の候補科目について
- 4) 高校生を対象とした大学における科目等履修の事例について
- 5) 被提供校における生徒受講に向けた対応と今年度の配信予定授業について

〔議事内容〕

新年度会議体の発足にあたり、前年度（令和４年度）の実施報告書に記載された５つの事業項目ごとに、これまでの経緯と進捗状況について報告を行い、提供する個別最適な学習プログラム・コンテンツと目指すべき先取り履修システムの方向性について、委員から意見の集約を行った。

続けて、先取り履修の候補にあがっている筑波大学の主な授業科目群について説明すると共に、本年度の夏期休暇期間に試行的に高校生の聴講を認める集中授業科目「国際農業研修Ⅶ」と「平和と法」について、授業科目担当教員より、科目のねらいと概要、高校生の参加方法が紹介された。

さらに、高校生を対象とした大学における科目等履修のこれまでの事例について、国内における関連法規改正の経緯、筑波大学の過去例、WWL 事業や他学における代表的なケース等、今後の制度設計において参考となる情報の共有を行った。

②第２回会議（令和５年１０月１０日（火）オンライン会議）

〔議事次第〕

- 1) 推進会議構成員（オブザーバー）の追加について
- 2) 前回議事録（案）の確認
- 3) 個別最適な学習環境構築推進事業の進捗について
 - ・「大学の学びの先取り履修システム」の構築について
 - ・大学授業科目の先取り履修１～「平和と法」高校生参加報告
 - ・大学授業科目の先取り履修２～「国際農業研修Ⅶ」高校生参加報告
 - ・2023 年度開講 筑波大学 専門導入科目（オンデマンド先取り履修科目の候補）
- 4) 被提供校の生徒の受講に向けたシステムの検討について

〔議事内容〕

前回会議以降の本事業の進捗について報告を行った。「大学の学びの先取り履修システム」の構築にあたっては、筑波大学との間で必要な規則改訂と教学事項の協議・調整を進め、現行の科目等履修生制度の枠組みを活用する方向性を確認し、今後の制度設計の進め方と留意点について、委員間で質疑応答を行った。

続けて、夏期に高校生が聴講履修した集中授業科目「平和と法」「国際農業研修Ⅶ」について、

授業科目担当教員より実施報告を行った。「平和と法」には被提供校の高校生 26 名および特別参加の中学生 3 名が参加し、高校生、大学生、大学院生が広範な社会分野のテーマについてディスカッションして深い学びを得たこと、「国際農業研修Ⅶ」では高校生 6 名がインドネシアの生態系と製紙産業についての海外フィールド実習に参加し、英語をベースにした授業プログラムでの成果発表、現地学生と活発な交流など得難い成果をあげたことが報告された。

さらに、先取り履修の候補にあがっている筑波大学のオンデマンド科目を中心とした「専門導入科目」群について、本年度の開設状況と、高校生が進路指針として受講する上での訴求メリットなど、有用な情報共有を行った。

③第 3 回会議（令和 6 年 1 月 23 日（火）オンライン会議）

〔議事次第〕

- 1) 前回議事録（案）の確認
- 2) 個別最適な学習環境構築推進事業の進捗について
- 3) 「先取り履修」被提供校へのアンケート結果について
- 4) 今後の「先取り履修」授業科目の検討について

〔議事内容〕

「大学の学びの先取り履修システム」について、現行の科目等履修生制度の枠組みを利用して設計すること、令和 6 年度中に関連規則改正と科目選定、高校への説明・募集を行い、7 年度からの制度開始を目指すなどの今後のスケジュールが報告され、委員間で新制度の独自性や JV-campus との連携の可能性などについて質疑応答を行った。

続けて、先取り履修システムに関して、被提供校 8 校から提出されたアンケート回答をもとに、意見の集約と検討を行った。アンケート項目は、高校カリキュラム内での位置づけ、制度への希望、授業の実施形態と活用方法、単位認定など多岐にわたり、特別支援学校からは情報保障の要望などがあげられ、今後の検討のポイントとなる情報交換を行った。

(5) 筑波大学 授業科目の先取り履修 候補対象授業科目

筑波大学 授業科目の先取り履修 目的および候補対象授業科目

A WWL / 個別最適の事業計画書に記載された目的

- 1) 高校生に対して、課題解決型学習への興味・関心を喚起する。
- 2) 高校在学時から、大学授業科目を先取り履修し、単位修得させることにより、優秀な学生の大学早期卒業を可能とする。
- 3) 持続可能な国際社会の創成に向けて活躍できる人材を育成する。

B 高校/大学のカリキュラム接続と進路指導上の観点から見た目的

- 1) 高校までに培ってきた学力を改めて確認し、さらなる発展学習につなげる。
- 2) 大学における学びを先取りすることにより、さまざまな学問領域を俯瞰的にとらえるとともに、理解を深め、進路決定の参考・指針とする。
- 3) 今後の地球規模の課題解決に向けて、基礎となる思考力を養い、自らの問題として関心を持ち続けるための動機づけの機会とする。

C 現在 候補対象となっている授業科目

[専門科目 社会・国際学群－社会学類－法学]

科目番号	科目名	授業方法	実施形態	単位	学類	年次	学期	曜時限
BB28841	平和と法	講義	対面(オンライン併用型)	2	社会学類	1-4	春C/夏季休	集中

[専門科目 生命環境学群－生物資源学類－横断領域科目－インターンシップ]

科目番号	科目名	授業方法	実施形態	単位	学類	年次	学期	曜時限
EC41173	国際農業研修VII	実習・実験・実技	対面(英語で授業)	2	生物資源学類	1-3	通年	応談

[基礎科目 共通科目 総合科目－学士基盤科目]

科目番号	科目名	授業方法	実施形態	単位	学類	年次	学期	曜時限
1226071	世界のTSUKUBAで学ぶ	講義	対面(オンライン化予定)	1	共通	1	秋AB	金6

[基礎科目 専門導入科目]

- ・専門分野の入口となる科目として、1年次配当で全学対象に開設、異なる分野を目指す学生でも履修できる。
- ・高校生が様々な学問領域に理解を深めて、進路決定の参考、指針、動機づけとする目的で、大学初年次生と同様、有効に活用できるのではないか。
- ・7割がオンデマンド科目で、対面授業やリアルタイム授業のように 受講時間・受講場所の制約が少ない。
- ・専門導入科目は外部の一般の科目等履修生の対象科目になっていないので、今後、高校生向けの先取り履修科目として公開すべく要請してゆく必要がある。

2024年度開講予定 専門導入科目（オンライン-オンデマンド型）

科目番号	科目名	授業方法	実施形態	単位	学類	年次	学期	曜時限
AB50B11	史学入門	講義	オンライン(オンデマンド型)	1	人文学類	1	春BC	月2
AB50C11	考古学・民俗学入門	講義	オンライン(オンデマンド型)	1	人文学類	1	春BC	月1
AB50E11	言語分析入門	講義	オンライン(オンデマンド型)	1	人文学類	1	秋AB	月1
AB50F11	個別言語学入門	講義	オンライン(オンデマンド型)	1	人文学類	1	春BC	火2
AC56011	日本・アジア領域比較文化研究	講義	オンライン(オンデマンド型)	1	比較文化学類	1	春BC	木3
AC56021	英米・ヨーロッパ領域比較文化研究	講義	オンライン(オンデマンド型)	1	比較文化学類	1	秋AB	金4
AC56031	フィールド文化領域比較文化研究	講義	オンライン(オンデマンド型)	1	比較文化学類	1	春A	火1,2
AC56041	表現文化領域比較文化研究	講義	オンライン(オンデマンド型)	1	比較文化学類	1	秋AB	金6
AC56051	文化科学領域比較文化研究	講義	オンライン(オンデマンド型)	1	比較文化学類	1	秋AB	木5
AC56061	思想文化領域比較文化研究	講義	オンライン(オンデマンド型)	1	比較文化学類	1	春B	火5,6
AE56A11	共生のための社会言語学	講義	オンライン(オンデマンド型)	1	日本語・日本文学類	1	秋AB	火2
AE56A31	共生のための人類学	講義	オンライン(オンデマンド型)	1	日本語・日本文学類	1	春BC	火1
AE56A41	共生のための歴史学	講義	オンライン(オンデマンド型)	1	日本語・日本文学類	1	春BC	金3
AE56A61	日本文学と文化	講義	オンライン(オンデマンド型)	1	日本語・日本文学類	1	秋AB	火1
BB05011	社会学の最前線	講義	オンライン(オンデマンド型)	1	社会学類	1	秋AB	水6
BB05021	法学の最前線	講義	オンライン(オンデマンド型)	1	社会学類	1	秋AB	木6
BB05031	政治学の最前線	講義	オンライン(オンデマンド型)	1	社会学類	1	秋AB	水6
BB05041	経済学の最前線	講義	オンライン(オンデマンド型)	1	社会学類	1	秋AB	木6
BC50111	国際学I	講義	オンライン(オンデマンド型)	1	国際総合学類	1	秋AB	金5
BC50121	国際学II	講義	オンライン(オンデマンド型)	1	国際総合学類	1	春A	木3,4
BC50131	国際学III	講義	オンライン(オンデマンド型)	1	国際総合学類	1	秋AB	金3
BC50141	国際学IV	講義	オンライン(オンデマンド型)	1	国際総合学類	1	春B	金5,6
CA10001	人間学I	講義	オンライン(オンデマンド型)	1	人間学群共通	1	春A	月1,2
CA10051	障害科学I	講義	オンライン(オンデマンド型)	2	人間学群共通	1	春BC	木5,6
CA10061	障害科学II	講義	オンライン(オンデマンド型)	2	人間学群共通	1	秋AB	火1,2
CA10201	人間学II	講義	オンライン(オンデマンド型)	1	人間学群共通	1・2	秋AB	NT
CB11081	教育基礎論	講義	オンライン(オンデマンド型)	2	教育学類	1	春BC	金5,6
CB11091	学校の経営・制度・社会	講義	オンライン(オンデマンド型)	2	教育学類	1	秋AB	金5,6
CC11211	心理学概論	講義	オンライン(オンデマンド型)	2	心理学類	1	春BC	月1,2
CC11221	心理学研究法	講義	オンライン(オンデマンド型)	2	心理学類	1	秋AB	月1,2
EB00001	生物学序説	講義	オンライン(オンデマンド型)	1	生物学類	1-3	秋AB	月1
EB00011	生物学序説	講義	オンライン(オンデマンド型)	1	生物学類	1-3	春C	火1,2
EB00021	生物学序説	講義	オンライン(オンデマンド型)	1	生物学類	1-3	春A	木5,6
EE11151	地球環境学1	講義	オンライン(オンデマンド型)	1	地球学類	1	春BC	火2
EE11161	地球環境学2	講義	オンライン(オンデマンド型)	1	地球学類	1	秋AB	金6
EE11251	地球進化学1	講義	オンライン(オンデマンド型)	1	地球学類	1	春BC	木4

科目番号	科目名	授業方法	実施形態	単位	学類	年次	学期	曜時限
FBA1451	数学概論	講義	オンライン(オンデマンド型)	1	数学類	1	春BC	NT
FCB1401	物理学概論	講義	オンライン(オンデマンド型)	1	物理学類	1	春C	金5,6
FF17011	応用理工学概論	講義	オンライン(オンデマンド型)	1	応用理工学類	1	春A	NT
FG16051	工学システム概論	講義	オンライン(オンデマンド型)	1	工学システム学類	1	春B	NT
FH61131	会計と経営	講義	オンライン(オンデマンド型)	1	社会工学類	1	春A	木5,6
GA12111	知能と情報科学	講義	オンライン(オンデマンド型)	1	情報学群共通	1	春BC	火2
GA12201	計算と情報科学	講義	オンライン(オンデマンド型)	1	情報学群共通	1	春C	木5,6
GA12301	システムと情報科学	講義	オンライン(オンデマンド型)	1	情報学群共通	1	秋B	火5,6
GA12401	情報科学概論	講義	オンライン(オンデマンド型)	1	情報学群共通	1	春B	金5,6
GA13401	情報メディア入門	講義	オンライン(オンデマンド型)	1	情報学群共通	1	春A	金5,6
GA13501	コンテンツ入門	講義	オンライン(オンデマンド型)	2	情報学群共通	1	秋AB	金5,6
GA14111	知識情報概論	講義	オンライン(オンデマンド型)	1	情報学群共通	1	春A	火1,2
GA14121	知識情報概論	講義	オンライン(オンデマンド型)	1	情報学群共通	1	秋AB	月2
GA14201	知識情報システム概説	講義	オンライン(オンデマンド型)	1	情報学群共通	1	春BC	木4
GA14301	図書館概論	講義	オンライン(オンデマンド型)	2	情報学群共通	1	秋AB	木3,4
HB21141	行動生理学の基礎	講義	オンライン(オンデマンド型)	1	医学類	1	春BC	NT
HB21161	放射線と生命—人体への影響と医療への貢献—	講義	オンライン(オンデマンド型)	1	医学類	1	秋AB	NT
HB21201	形成外科学入門	講義	オンライン(オンデマンド型)	1	医学類	1	秋AB	月1
HB21231	スポーツ医学とは?フロンランナーに聞いてみよう!!	講義	オンライン(オンデマンド型)	1	医学類	1	秋C	NT
HB31131	基礎医学研究の最前線	講義	オンライン(オンデマンド型)	1	医学類	1	春BC	NT
HC21071	人体機能学	講義	オンライン(オンデマンド型)	2	看護学類	1	春BC	木3,4
HC21081	人体構造学	講義	オンライン(オンデマンド型)	2	看護学類	1	春BC	水3,4
HC30071	看護生命倫理	講義	オンライン(オンデマンド型)	1	看護学類	1	秋B	火5,6
HC30141	基礎看護学概論	講義	オンライン(オンデマンド型)	1	看護学類	1	春A	水3,4
HC33011	精神看護学概論	講義	オンライン(オンデマンド型)	1	看護学類	1	秋C	木5,6
HC34001	高齢者看護学概論	講義	オンライン(オンデマンド型)	1	看護学類	1	秋B	水3,4
HC36191	生涯発達と家族支援	講義	オンライン(オンデマンド型)	2	看護学類	1	春BC	火5,6
HE21001	医学史	講義	オンライン(オンデマンド型)	1	医療科学類	1	秋AB	月2
HE21051	医療・生命科学とテクノロジー	講義	オンライン(オンデマンド型)	1	医療科学類	1	春BC	金3
HE35071	医療科学概論	講義	オンライン(オンデマンド型)	1	医療科学類	1	秋AB	金4
W160531	スポーツの技術を人文社会科学から考える	講義	オンライン(オンデマンド型)	1	体育専門学群	1	春BC	月1
YAX2011	アート&デザイン入門	講義	オンライン(オンデマンド型)	1	芸術専門学群	1・2	春BC	月2
YAX2021	芸術と文化	講義	オンライン(オンデマンド型)	1	芸術専門学群	1・2	秋AB	月1
YAX2031	芸術と社会	講義	オンライン(オンデマンド型)	1	芸術専門学群	1・2	秋AB	月2

2 JV-Campus への「WWL 附属学校教育局 Box」の設置と管理

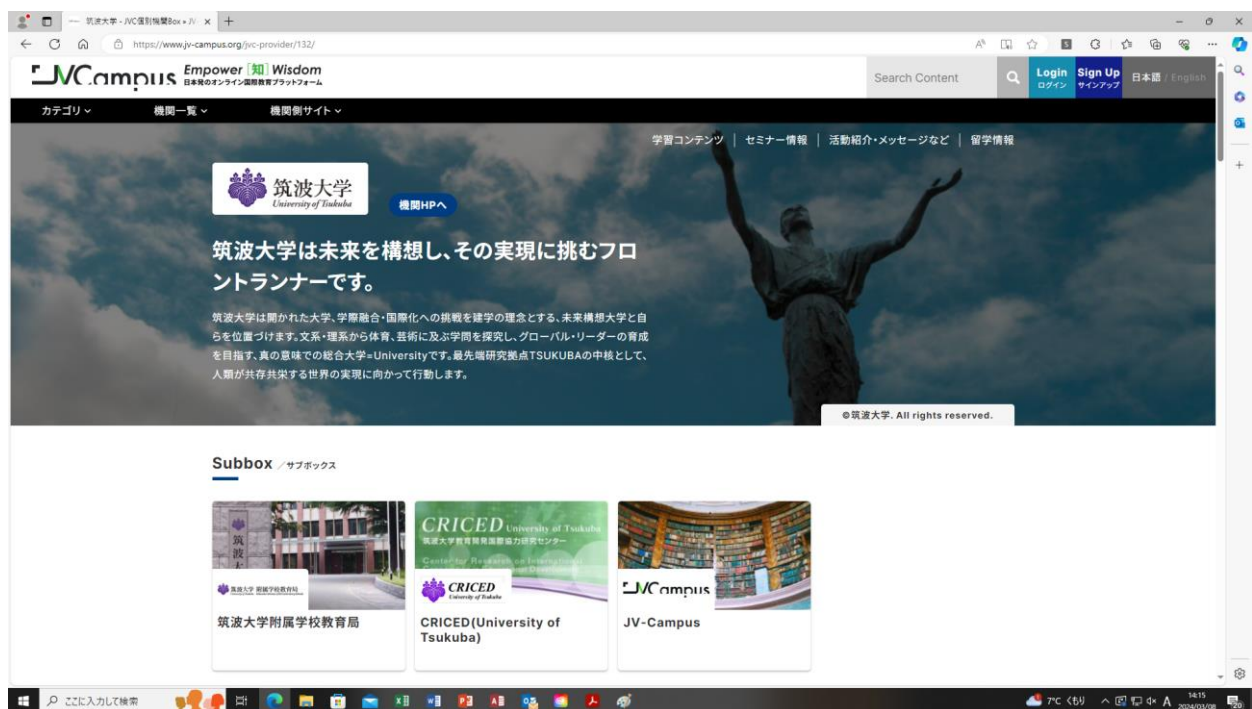
(1) JV-Campus の現状

高等教育の国際競争力の強化や国際展開の推進を進める施策として平成 26 年にスタートした「スーパーグローバル大学創成支援事業（SGU 事業）」において、筑波大学はタイプ A（トップ型＝世界レベルの教育研究を行う大学）に採択され、この 10 年間、海外のトップレベルの大学との教育・研究交流や学位プログラムの国際化を進めてきた。また、国境や機関など、あらゆる壁を越えるトランスボーダー大学の構想のもと、高大連携も社会における垣根をなくす取組みの 1 つとして位置づけてきた。

そして、新型コロナウイルス感染症の世界的流行で海外との交流が制限される中、オンライン教育・交流が急速に進展したことから、これらの大学群の多様な実績の横展開・連携を図るために、SGU 採択大学が中心となり、「大学の国際化促進フォーラム」が令和 3 年 9 月に設立された。

本学は同フォーラムの副代表幹事校として、フォーラムの中核的プロジェクトであるオンライン国際教育プラットフォーム事業「Japan Virtual Campus = JV-Campus」の立ち上げと普及促進において、主導的な役割を果たしてきた。そして、SGU 事業終了後の令和 6 年 4 月からは、学内に JV-Campus 連携室を設立し、学内教育コンテンツの開発及び実践運用を通じて、国際的オンライン教育を先導してゆく予定である。

本「個別最適」の事業においても、これら学内における国際化に向けた取組み事業と連携しつつ、先取り履修のコンテンツを積極的に JV-Campus に登録・発信してゆき、新たな知見を蓄積するとともに、相乗効果を生み出すことを志向するものである。



JV-Campus 筑波大学トップページ上にある附属学校教育局 Box

（２）筑波大学附属学校教育局 Box 設置と試行利用について

昨年度より、JV-Campus 個別機関 Box の１つとして、新たに「附属学校教育局 Box」を設置する準備・調整を進め、令和５年５月に登録完了することができた。構想では、先取り履修システムの学習コンテンツは、このプラットフォームを中心に発信してゆく予定になっている。

まず本年度は、高校生が夏期に試行的に聴講参加した生物資源学類の「国際農業研修Ⅶ」と社会学類の「平和と法」の２つの集中授業科目において、学習コンテンツを「附属学校教育局 Box」に登録することになった。「国際農業研修Ⅶ」では、インドネシアの自然生態系保護の専門家の講義など４コマのオンライン動画を JV-Campus に登録して、海外研修参加前に履修者が事前に視聴した。一方の「平和と法」については、筑波大学の正規授業科目において、JV-Campus を学習支援システムとして全面的に活用した初のケースとなった。

シラバス掲載から、オンライン講義やオンデマンド動画へのリンク、授業スライド・参考文献リストの提示、履修者のプレゼンテーションやディスカッション資料の登録、出席確認、交流掲示板まで、通常の学習支援システム（LMS）が備えているほぼ全ての機能を活用して、対面とオンラインで授業を行った。一点、本学の通常の大学授業では、国内の大学に多く普及している学習支援システム「manaba」が導入されており、今後、既存の授業科目のコンテンツを JV-Campus で発信してゆくにあたり、２つの LMS 間のインターフェースをどのようにとってゆくか、懸案事項になると考えられる。

今回、「平和の法」を聴講した高校生 26 名および特別参加の中学生 3 名へは、JV-Campus の初めての利用に際して、JV-Campus アカウントおよび「平和と法」コース登録の手順書を作成して事前配付を行い、支障なく学習を進めることができた。



JV-Campus 「平和と法」コンテンツページ

3 個別最適な学習プログラム・コンテンツの提供と効果の検証

(1) 社会・国際学群 社会学類開講「平和と法」実施報告

令和4年度に採択された本事業における高校生の「先取り履修」の試行的取組みとして、同事業推進会議構成員でもある秋山肇助教（人文社会系）による学部生向け授業「平和と法」を、同事業の被提供校である附属高等学校3校や特別支援学校3校の高等部、東京学芸大学附属中等教育学校、お茶の水女子大学附属高等学校の生徒が聴講生として受講した。

平和と法に関わる様々なテーマで発表・議論を進める秋山助教の授業は、本事業の目的とする「持続可能な国際社会を創る人材育成」に大きく寄与するものと考えられ、成果が期待される。この授業の成果は、秋山助教が執筆した「高大連携による議論を通じた平和教育のあり方：筑波大学における「平和と法」授業の実践を通して」と題した論文として、『筑波大学学校教育論集』第45巻に公表予定である。

実施概要：筑波大学 社会・国際学群 社会学類開講「平和と法」の高校生による聴講

授業概要：法の視点を踏まえて平和の定義を検討し、さまざまな事例を取り上げながら平和を実現する方法を大学生、大学院生に混ざって高校生が参加して発表し議論する。

授業日程：7/15（土）オンライン（JV-Campus 利用・同時双方向、オンデマンド視聴も可）
8/19（土）、8/20（日）、8/21（月）対面（筑波キャンパス、オンライン参加可能）

参加形式：聴講は、7/15のオンライン授業（またはオンデマンド視聴）を受講した後、対面授業は可能な範囲で出席する。高校生もグループプレゼンテーションでの発表が可能。
聴講生は、社会学類長発行の聴講証明書を取得できる。

参加生徒の内訳

附属高等学校：2名 附属駒場高等学校：1名 附属坂戸高等学校：1名
附属視覚特別支援学校高等部：6名 東京学芸大学附属国際中等教育学校：12名
お茶の水女子大学附属高等学校：4名 附属駒場中学校：3名 計29名

授業内容（テーマ）

・第1回～第4回 7/15（オンライン）

イントロダクション：平和とはなにか、平和の分析枠組み：直接的暴力・構造的暴力・文化的暴力、社会における法の役割・国内法、国際法、平和におけるミュージアムの役割

・第5回～第8回 8/19（対面）

戦争・国際関係、難民・避難民、ジェンダー・セクシュアリティ、中心と周縁：沖縄、福島

・第9回～第12回 8/20（対面）

障害と医療、科学技術と平和、COVID-19 と平和、環境問題

・第13回～第16回 8/21（対面）

教育と平和、スポーツ・オリンピック、芸術と創造性

まとめのディスカッション：法はいかに平和を実現しうるか？

対面での授業では、あらかじめテーマごとに分担・班分けしたグループの大学院生・大学生・高校生が、全体の前で各テーマと平和に関わる調査内容や各個人の意見、ディスカッションクエストを発表した。次に、発表に関する質疑応答があり、グループ別の討議を経て、いくつかのグループからの発表やそれに対する秋山助教からのコメントがあった。

まとめとして秋山助教は、発表やディスカッションでの議論は、個人的に疑問に思う考えもあったと思うが、まずは受け入れてみてほしい。思ったことがなかなか言えない社会であるからこそ、否定されることを恐れて発言を控えることにならないようにしたい。「その人の靴を履いてみた」とき、何が見えるのかを感じてほしいと述べた。



秋山助教による講義



各グループによるテーマ別発表



グループ別討議

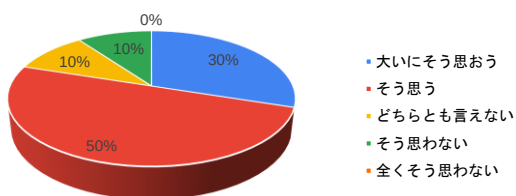
2023年度「平和と法」聴講参加 高校生アンケート

Q1とQ2. → 所属等の質問なので省略

Q3. この授業を受ける前は「平和」にどのようなイメージがありましたか（自由記述）

- ・争いのない誰もが生活に不自由を感じない世界。言ってしまうと、人類が望む理想の世界みたいなもの。
- ・抽象的すぎるもので、深掘りしても「人それぞれ」と終わってしまうものというイメージ。
- ・非戦争状態
- ・難しい
- ・与えられるもの、自然に存在している空気のようなもの。
- ・争いが無い
- ・戦争が存在せず、みんなが笑って遊んでいるイメージ。
- ・戦争がない、問題点がない、など「～ない」という消極的平和というイメージがあった。
- ・戦争や紛争など、物理的な戦闘が起こっていない時が平和だと考えていた。

Q4. この授業を受けて「平和」のイメージに変化はありましたか



Q5. (Q4で「大いにそう思う」、「そう思う」と答えた方のみ)以下の何によって変化がありましたか？



Q6. (Q4で「大いにそう思う」「そう思う」と答えた方のみ)なぜですか

- ・平和には平和を構成する要素があって、それを紐解くことで平和を目指す上でこなしなくてはならない課題、直すべき要因を少し見つけることができた。
- ・戦争以外にも様々な暴力が存在することを知ったから。
- ・平和とは、人から与えられるものではなく、不断の努力で維持していくものだを知ったから。
- ・争いが無いだけでは平和とはいえず、いじめや差別もない、みんなが幸せな状態でないと平和ではないのかも、と考えが変わったから。
- ・今までは平和に対して漠然としたイメージしか持っておらず、実際にそれを実現することは難しいのではないかと考えていたがグループディスカッションなどを通してそれを実際に実現させるためにはどのようなことが必要かを考え、より平和が具体的なものへと変わっていったから。
- ・人それぞれ平和の捉え方が異なっており、簡単に「～ない」と割り切ることはできないと思ったから。また、「難民を受け入れる」のように「～する」ことによる積極的平和の状態もあると学んだから。
- ・暴力の中にもいくつかの構造が存在することを知り、また、暴力以外の面からも平和について考えられることを知ったため。
- ・いくつかのグループディスカッションで「多様性」や「平等」「考えをシェア」などのキーワードが出てきたり、頭の中に出てきて、それも平和を作る重要な一部であると思った。

Q7. (Q4で「どちらとも言えない」と答えた方のみ)なぜですか

- ・他人の意見を通してさらに自分の考えを深められたから。

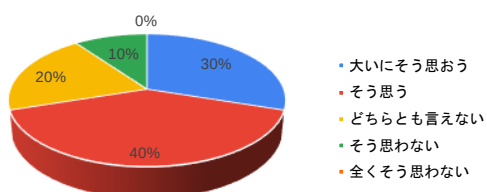
Q8. (Q4で「そう思わない」、「全くそう思わない」と答えた方のみ)なぜですか

- ・あまりグループディスカッションやプレゼンでその考えに影響するものがあがらなかった。

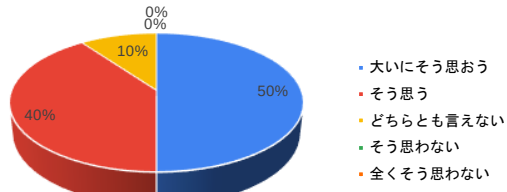
Q9. 今の「平和」のイメージを教えてください（自由記述）

- ・ただ戦争がないことが平和ではなく他にも様々な要素が平和と関係していることを学び平和へのイメージが少し変わった。
- ・戦争や紛争争いごとなど、いわゆる人の生命維持のための不安要素を取り除いていった先にみえる未来が平和な世の中なのではないかなと考える。
- ・幸せ、well-being
- ・多角的な面からのアプローチが必要であり、前のイメージと変わらず難しい。
- ・天与のものではなく、人が協力して維持していくもの。
- ・みんなが幸せ
- ・いかなる立場の人が誰も暴力を受けていない状態
- ・絶対的平和というものはない。人それぞれ、平和の捉え方は異なるが1人でも多くの人が生活しやすい世の中こそが平和だと思う。
- ・全ての人間が地球上全ての生物の共同体の一員に属しているという自覚を持ち、自己利益だけに囚われなくなった、種を超えた相互扶助が平然と行われている世界が平和だと考えている。
- ・「平和」とは人々が会話を通して紛争を解決できるうえで、人々が自分の考えや個性を平等にシェアできてお互い尊重しあう環境である。

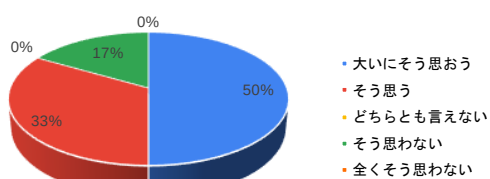
Q10. 参加者の授業参加の機会は十分だったと思いますか



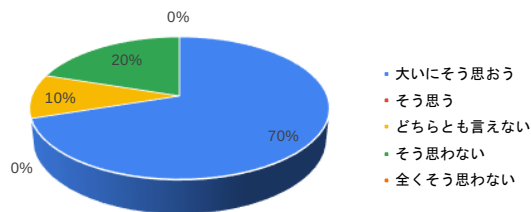
Q11. 7月15日の教員によるオンライン講義は授業内容の理解に役立ったと思いますか



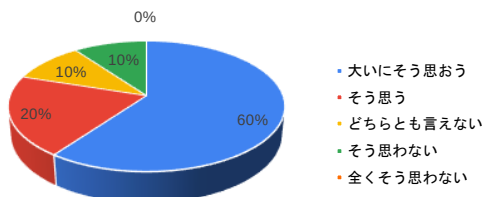
Q12. (グループプレゼンテーションに取り組んだ方のみ)グループプレゼンテーションの準備は授業内容の理解に役立ったと思いますか



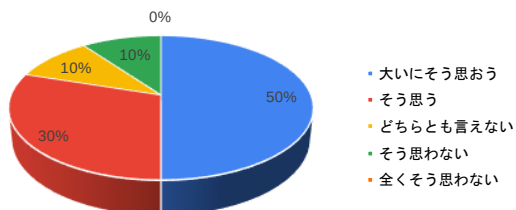
Q13. グループプレゼンテーションを聴くことが授業内容の理解に役立ったと思いますか



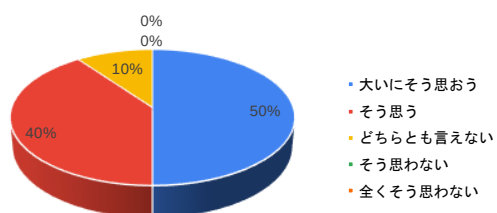
Q14. グループプレゼンテーション後の教員によるコメントは授業内容の理解に役立ったと思いますか



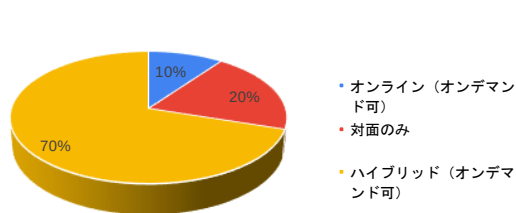
Q15. グループ・ディスカッション、クラス・ディスカッションは授業内容の理解に役立ったと思いますか



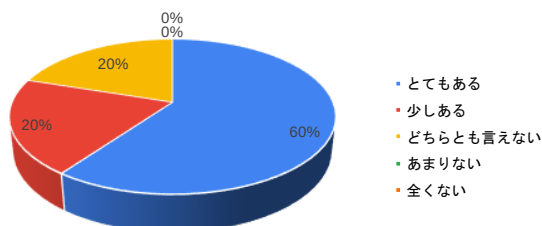
Q16. 初日の授業をオンライン(オンデマンド可)で実施する授業形式は、学びに役立ったと思いますか



Q17. 初日の授業は、オンライン(オンデマンド可)、対面のみ、ハイブリッド(オンデマンド可)のいずれが望ましいですか



Q18. 中学生・高校生、大学生、大学院生が同じ場で平和について学ぶことのメリットはどの程度あると思いますか

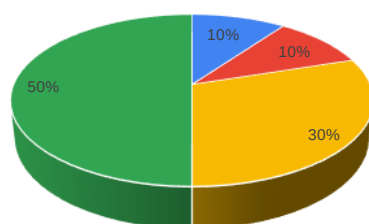


Q19. (Q18で「とてもある」「少しある」と答えた方のみ) なぜですか	
・同じ年代の中では挙がらないような考えや意見が聞けて非常に貴重な体験をできたと感じた。 ・中高生にとってはより知識がある大学生、院生と一緒に学べるので参考になることがたくさんあったから。 ・難しいトピックであるが、国際問題に目を向ける機会になるから。 ・普段おかれている環境などが違う、立場の異なる人たちが集まったほうが様々な意見が出し合えるから。 ・高校生の自分にとっては普段はほとんど同級生としか関わることができないため、今回より様々な立場・年齢の人と関わることができて新しい考え方や自分とは異なる考え方をしてみるという視点が生まれたから。 ・育った環境や生きている時間など多くの違いがあるからこそ、あらゆる視点から平和にアプローチできると感じたから。 ・様々な世代から見た「平和」に対する意識や考えを互いに共有でき、その中で新たな考えが生まれることもあるから。(個人としては他の世代や他校の方々からとても刺激を受けることができた) ・中学生・高校生の場合では大学生や大学院生の授業についてもっと学ぶことができる。	
Q20. (Q18で「どちらとも言えない」と答えた方のみ) なぜですか	
・高校生の私たちは沢山のことを学ばせていただき、十分すぎる教育の場を設けていただけたけれど、大学生側が高校生と学ぶことで得られるメリットと割にあっていないのではないかと思ったから。 ・大学の授業としての内容と高校生が参加する上での内容が少し異なると考える。僕は、もう少しレクチャーが多めの比率で行われることを期待したが、大学生や高校生のプレゼンばかりでちょっとつまらなかった。	
Q21. (Q18で「あまりない」「全くない」と答えた方のみ) なぜですか	
→ 選択回答者なし	
Q22. この授業での最も大きな学びはなんでしたか (自由記述)	
・「平和」というのはただ一つの意味があるだけではなく様々な要素が複雑に関係している。 ・平和を考えることから逃げなかったこと。 ・社会科学が自然科学と同様に大切な学問であるという実感 ・難民についての発表が興味深かった。 ・構造的暴力は広範にあらゆるところで存在している。 ・完全な平和を実現することは難しい、と分かったこと。 ・相手の靴を履いてみる。 ・ほとんどの物事にはメリット・デメリットの両義性があり、一概に善し悪しを判断できない。しかし、いつまでも「判断できない」と言うだけでは進歩はないため、両者のバランスをみながら解決策を見つけていくべきだと学んだ。 ・多角的、抽象的に物事を捉えることの大切さや大変さ。 ・7月15日の講義で扱った原爆投下の例におけるアメリカ人の様々な考えが最も大きな学びであった。	
Q23. 授業で扱ったテーマ以外で、「平和」と関連させて学びたいことがあれば教えてください (自由記述)	
・経済発展 (新興国の方が治安悪い?) ・ジャーナリズム ・授業で何回か触れられてはいましたが、世界的な平和条約についてやその条約の効果などにもっと注目して学びたい。 ・特定の分野ではないが、自然科学によりフォーカスを当てた内容で平和考えてみたい。	
Q24. この授業に改善できる点があるとすればなんですか (自由記述)	
・もう少し大学生と交流する機会を増やしてほしい。 ・拘束される時間が長く、その割にプレゼンの内容が精査されていないものもあったのが苛立たしかった。自分の語りたことを語るだけの独りよがりな人が多かった印象がある。 ・対面で授業を行う日程を、3日連続ではなく少しあけてもらいたかった。 ・グループディスカッションで話す人をランダムに? 変える。 ・ディスカッションで話し合うグループをあらかじめ決めていただきたかったです。(7月15日の時のように…) ・クラスディスカッションの時間をあと10分ほど多めに確保してほしい。	
Q25. その他、教員や授業関係者に伝えたいことがあれば自由に書いてください	
・3日間で交通費10000円くらいかかりました。僕は大丈夫でしたしそれくらい出す価値があると思いましたが、それが原因で現地に行きたくない人もいたと思います。 ・私は新型コロナにかかってしまい、対面の授業に参加できずとても残念でした。zoomでの参加も考えたのですが、体調が優れずそれも叶いませんでした。筑波大学に行くのをとても楽しみにしていたので、また機会があれば聴講に参加させてもらいたいです。 ・興味深い授業をありがとうございました。 ・大学生や大学院生、他校の中高生と関われ、共に講義を受けられるという大変貴重な機会をいただき、誠にありがとうございました。	
以上のQ1.~Q25.までは、大学生、大学院生、茨城県立高校の生徒と共通の質問	
次頁のQ26.~Q29.は、筑波大学附属各校・東京学芸大学附属国際中等教育学校・お茶の水女子大学附属高校の生徒専用の質問	

Q26. 今回 この授業を受けてみようと思った主な理由は何ですか（自由記述）

- ・大学生とともにプレゼンをしたりグループディスカッションをするのはあまりできる体験ではなく興味を持ったため参加しようと思った。
- ・学校教員からの紹介メール。
- ・大学で哲学、特に倫理を専攻するつもりで、それに役立ちそうだったから。
- ・法学部に興味があったから。
- ・学校から紹介されたから。
- ・大学の授業に興味があったから。
- ・筑波大学に興味があり、その中でも「平和」という概念に対して考えてみたいと思ったから。
- ・ウクライナ戦争のニュースを毎日のように目にする中で、平和について自分なりに考えるきっかけになればと思ったから。
- ・将来の大学進学や就職に向けての視野や価値観を広げるため。
- ・自分は国際関係などの分野に関心を持っており、この授業のテーマが面白いと思った。さらに大学生・大学院生と一緒にディスカッションする貴重な機会でもあったため、参加しようと思った。

Q27. 参加した日にちを選択してください



- ・7/15（事後の動画視聴を含む）のみ
- ・7/15（事後の動画視聴を含む）と8/19-8/21のうち1日
- ・7/15（事後の動画視聴を含む）と8/19-8/21のうち2日
- ・7/15（事後の動画視聴を含む）と8/19-8/21のうち3日

Q28. 今回 学んだことは 将来の進路や学問分野の選択に役立ちそうですか どのように役立ちますか

- ・法学部に進むために、リーガルマインドを得られたと思う。
- ・役立ちます。哲学倫理は「どうあるべきか」を研究する学問であり、その点において「平和はどうあるべきか」を考えることで解像度が上がった。また、「そのためにどうすればよいのか」についても考えられたのでさらに学びになった。
- ・学部選びに役立ちます。
- ・今のところはわからない。
- ・大学選びや学科選択に役立つと思います。
- ・将来自分がどのような人になりたいのかと考えたときに、相手の靴を履き相手のために何かができるような人になりたいと思った。そこで志望大学や職種が変わっていくと考える。
- ・医学部を目指しているのですが、目の前の医療形態だけでなく、そもそも医療が行き届いていない地域（構造的暴力）があると考えられるなど、より広い視野をもてると思う。
- ・将来士業に就きたいという目標の中で様々な方と関わっていくと予想し、その際使うであろう多種多様な意見や考え方を聞く力や分析する力をたくさん養うことができた。
- ・自分がこの授業を受けて楽しかったということで、「やはりこのような分野に進みたい」と確信した。

Q29. また大学の授業を受講したいですか

受けるとすればどんな授業科目や授業形式を希望しますか

- ・法律についてをより深掘りしてみたい。
- ・受講したいです。受講者や教授と活発にコミュニケーションを取れるのが望ましいです。深く理解できるし、何より楽しいので。今回みたいな感じで。
- ・受講したいです。抽象的なトピックを考えることが面白い。
- ・次はもっと生徒主導ではなく、教員が講義をするタイプの授業を受けたい。
- ・医学系にも興味があるので、授業を受けてみたいです。大学の雰囲気も感じてみたいです。対面での参加を希望します。
- ・また受講したいです。他にどのような授業形式があるのかわからないが、今回のようなプレゼン・ディスカッション系もしくはフィールドワーク系の授業に興味がある。
- ・今回のように、様々な年齢層の方との対話を通して自分なりの考えを見つけられる授業を受講したい。
- ・具体的な科目は特にないが、社会科学を取り入れた自然科学が主のもの（そんなものがあるのかは分からない）を文理関係なく多種多様な人が参加できる講義を受講したい。また、ディスカッションを取り入れてほしいが、それにあたっての前提知識も講義してほしい。
- ・似たような分野でまた受講してみたいです。もしかしたら発表する学生がもっと主導的に進める授業の形で、発表者から質問を問かけられるのもいい形だと思った。

（２）生命環境学群 生物資源学類「国際農業研修Ⅶ」実施報告

令和４年度に採択された本事業における高校生の「先取り履修」の試行的取組みとして、同事業推進会議構成員でもある野村名可男准教授（生命環境系）は、授業「国際農業研修Ⅶ」を、同事業の被提供校である附属坂戸高等学校と共同開発し、学部生と高校生がともに参加する形で実施した。

海外の農村における PBL（Problem-Based Learning 問題解決学習）を通した開発支援を目的とした国際援助の在り方について学ぶ野村准教授の授業は、本事業の目的とする「持続可能な国際社会を創る人材育成」に大きく寄与するものと考えられ、成果が期待される。

実施概要：筑波大学 生命環境学群 生物資源学類開講「国際農業研修Ⅶ」の高校生による聴講

授業概要：授業概要：海外の農村における PBL を通した開発支援を目的とした国際援助の在り方について学修する。附属坂戸高等学校生徒と協働で実施する。

授業日程：事前学修：7/1（土）～31（月）

準備講義：2 コマ（高大合同実施 1 コマ）

講義（JV-Campus 利用・オンデマンド）：4 コマ

- ① SDGs についての学修
- ② インドネシアにおける国立自然公園についての学修
- ③ インドネシアにおける自然生態系保護活動についての学修
- ④ APP(Asia Pulp & Paper)による製紙産業の概要と CSR(Corporate Social Responsibility)活動についての学修

海外研修：8/1（火）～ 8/11（金） ジャカルタ、ペカンバル、バンドン、ボゴール

参加形式：事前学修、準備講義 2 コマ、講義 4 コマを受講後、海外研修に参加する。

受講の高校生は、聴講証明書を取得できる。

参加生徒の内訳：附属坂戸高等学校：6 名 （学類生：8 名）

授業内容（海外研修）

- 8/2（水） APP 本社で企業の環境への取組み解説、森林火災モニタリングルーム視察
- 8/3（木） APP 社植林地・樹木園・農村地域住民支援サイト見学、APP 社製紙工場・植林用苗畑と育種実験施設見学
- 8/4（金） インドネシア環境林業省附属林業高等学校ペカンバル校訪問、現地環境 NPO ベランタラ基金と APP 本社が連携した森林再生プロジェクトサイトの見学、記念植樹
- 8/5（土）～6（日）研修前半の振り返り、レポート作成
- 8/7（月） インドネシア教育大学附属高等学校訪問・交流会
- 8/8（火） ボゴール農科大学附属コルニタ高等学校訪問・交流会・国際教育連携に関する協議
- 8/9（水） グヌングデパンランゴ国立公園訪問・森林生態系管理官によるインドネシアの森林保護に関する講義・熱帯林フィールドワーク・農村地域フィールドワーク
- 8/10（木） ドリー博士によるインドネシアの生物多様性に関する講義、研修の最終成果発表会（パクアン大学）・研修成果発表会および研修成果に関する現地大学教員、学生との質疑応答

生物資源学類では、20 年近く海外におけるフィールド実習プログラム科目を開講しており、「国際農業研修」という科目名で I から順番に様々な科目を開講してきた。一方、附属坂戸高等学校でも、数年前から東南アジアでのフィールド実習を行ってきていることから、協働の 1 つの科目として「国際農業研修Ⅶ」を開講することになった。

本授業は、大学 1～3 年生対象の 2 単位科目で「海外の農村における PBL を通した開発支援を目的とした国際援助の在り方について学修する」ことを目的としている。2020 年度に開設されたが、新型コロナウイルス感染症の影響により、今年度ようやく実施することができた。

実習は、主にインドネシアの生態系および製紙産業に焦点を当てた内容である。7 月に事前学習として、いずれもオンラインで、大学と高校で 1 コマずつ、高大協働で 1 コマの準備講義を実施した。さらに、実際にフィールド実習を行う現場から動画による講義を実施し、SDGs についての講義、専門官によるインドネシアにおける生態系保護を中心とした国立自然公園の運営についての講義、インドネシアの大学教員による自然生態系の保護に関する最先端の研究活動についての講義、インドネシア系の民間企業の日本支社による製紙産業の立場から自然生態系をどう捉えているかについての講義の計 4 コマを実施した。製紙産業については、生態系の保護とは逆のイメージがあるので、講義に加えている。動画はオンデマンドで配信を行い、将来的には JV-Campus で共有する計画である。

海外研修は 8 月 1 日から 11 日まで、インドネシアの都市、ジャカルタ、ペカンバル、バンドン、ボゴールで実施した。大学から 8 名（国際総合学類 4 名、生物資源学類 4 名）、高校から 6 名の学生・生徒が参加した。大学の参加希望者は多かったが、奨学金支給対象の研修プログラムのため、定員 8 名で選抜した。

研修では、ジャカルタの製紙会社 APP の本社で、会社概要について講義を受けた。同社の規模は非常に大きく、約 100 万 ha 以上の製紙用の植林地を持っており、山火事への対応など含め、1 日かけて概要の説明を受けた。その後、ペカンバルに移動し、視察・調査を行った。ペカンバルには非常に大きな植林地があり、実際の植林活動や製紙工場、動物の生態系等を視察し、生態系や農業に対する製紙会社の実際の支援保護活動などについて、現地の農民に話を聞いたりした。さらに、製紙原料となる植物の育種を行っている研究所を訪問して、講義を受けた。

その後、ジャワ島に戻り、国立自然公園で生態系の保護についての講義を 2 日間にわたり受けた。最後に、パクアン大学で現地の学生を含めた成果発表会を行い、高校生、大学生がそれぞれこの研修で得た成果や問題意識を日本人の立場から発表し、現地の学生と非常に活発な質疑応答を行った。

今回参加した高校生には、聴講修了証を発行した。将来的には、参加する高校生は科目等履修生として登録を行い、Advanced Placement プログラムとして開講したい。また、事前に動画を JV-Campus でオンライン配信して共有したい。高校生はとても積極的に質疑応答にも参加し、事後評価アンケートの回答内容を見ても、学ぶところが多かったという意見が多い。また、大学生ともう少し交流したかったという意見も多く寄せられているので、次回オンラインで、事前にもう少し話し合う機会を持てればよいと考える。

資料 受講生アンケート

<事前：高校生・大学生共通>

- 1 インドネシアの印象について（国際理解・他者理解）
- 2 この研修に参加しようと考えた理由を教えてください。
- 3 この研修で取り組んでみたいことや、身につけたい力について教えてください。

<事後：大学生>

- 1 10日間の研修のなかで、印象に残った点、興味を持たれた点、学ばれた点などをお書きください。
- 2 研修参加前後でインドネシアに対するイメージに変化はありましたか。変化があれば、その内容をお書きください（とくにない場合は、無しで構いません）
- 3 高校生と一緒に研修に参加したことについて感想や気づかれた点などをお書きください。
- 4 最後に、研修全体を振り返り、感想やお気づきの点など自由にお書きください。

<事後：高校生>

- 1 研修参加前後でインドネシアに対するイメージに変化はありましたか。変化があれば、その内容をお書きください（とくにない場合は、無しで構いません）
- 2 大学生(筑波大生)と一緒に研修に参加したことについて感想や気づいた点などを書いてください。
- 3 2名の先輩（附属坂戸高等学校卒業生、現大学生、インドネシア留学経験者）と一緒に研修に参加してくれたことについて感想や気づいた点などを書いてください。
- 4 研修全体を振り返り、印象に残ったこと、学んだこと、気づいたことなど自由に書いてください。



原料植林地帯の視察・調査（ペカンバル）



国立公園地域での生態系保護活動に関する学修



成果発表会（パクアン大学）

（３）令和５年度の事業遂行状況に対する指導助言と評価について

本事業に関しては、運営上、専門的見地から指導、助言及び評価を受けるための運営指導委員会と、実施状況を評価するための評価委員会が置かれ、それぞれ学校教育と高大接続に関しての学識経験を有する学外の専門家が委員を務め、さらに、本学の副学長３名（教育、国際、附属学校教育局担当）と１０数名の大学教員がオブザーバーとして参加し、意見を述べる会議構成になっている。

本年度は前期と後期の２回、運営指導委員会と評価委員会を合同でオンラインの形式で開催した。

会議では、本稿であげた２つの夏期集中授業の取組みに関して、多様な価値観を持つ他者とのディスカッション授業や、生態系保護と持続的開発を両立させる SDGs 的テーマの海外研修などを、高校生の時期に経験することの意義や教育的効果が高く評価された。さらに、高校生への単位認定を前提とした制度設計が必須であることや、大学授業の先取り履修を進めて、研究活動も先取りするような高大接続の新たな可能性、その他に取組みを進める教員への支援やインセンティブなどにも言及がなされた。

そして評価基準については、教育目的に則した量的データとともに、結果、プロセスにおける質的な変化の側面を多面的に見ることの重要性が指摘された。また、構想の趣旨に掲げられた事項に則して、具体的にどのような活動を行い、実現できた事とできなかった事を明確にして、できなかった課題をクリアにしてゆく結果説明が、今後の本事業の展開においても肝要かつ求められることが確認された。

（４）運営指導委員会・評価委員会 議事内容

①第１回会議（令和５年７月７日（金）オンライン会議）

〔議事次第〕

- 1) 個別最適な学習環境の構築に向けた研究開発事業 運営指導委員会・評価委員会について
- 2) 個別最適な学習環境の構築に向けた研究開発事業 進捗について
- 3) 大学授業科目における先取り履修の候補科目について
- 4) 新たな高大接続のための科目等履修制度案について
- 5) 「早稲田大学 高校生特別聴講制度」のヒアリング報告

〔議事内容〕

新年度にあたり、前年度（令和４年度）の実施報告書に記載された５つの事業項目について、これまでの経緯と進捗状況を報告、さらに先取り履修の候補にあがっている筑波大学の授業科目について説明すると共に、夏期に試行的に高校生が聴講を行う集中授業科目「平和と法」について、授業科目担当教員より、科目のねらいと概要が紹介された。両委員会の委員からは、本事業の取組み内容への質問・講評に加え、高大接続の教育効果、大学研究室との連携、単位認定の考え方、他学での先行事例等、多岐にわたる意見・助言が寄せられた。

続けて、先取り履修システムとして検討している「筑波大学 高大接続科目等履修制度（案）」の概要と先行事例の早稲田大学「高校生特別聴講制度」へのヒアリング結果が説明され、引き続き、制度設計上の留意点、授業担当教員へのサポート体制など、委員と意見交換を行った。

②第2回会議（令和6年2月20日（火）オンライン会議）

〔議事次第〕

- 1) 個別最適な学習環境の構築に向けた研究開発事業の進捗について
- 2) 大学授業科目の先取り履修 実施報告1～「平和と法」
大学授業科目の先取り履修 実施報告2～「国際農業研修Ⅶ」
- 3) 本年度事業に対する評価委員会 委員からの指導・助言
- 4) 「先取り履修」被提供校へのアンケート結果について
- 5) 本年度事業に対する運営指導委員会 委員からの指導・助言

〔議事内容〕

本年度の事業活動について、評価委員および運営指導委員に対して、遂行状況を把握して頂くとともに、適切に指導・評価を受けるべく、進捗状況と試行的な取り組み成果の報告を行った。

進捗状況として、「大学の学びの先取り履修システム」を現行の科目等履修生制度の枠組みと既存開設科目を活用して設計し、令和6年度中に関連規則改正を行い、7年度からの制度開始を目指すなどの現時点の構想が報告された。さらに試行的な取り組みの成果として、夏期に高校生が聴講履修した集中授業科目「平和と法」「国際農業研修Ⅶ」について、各授業プログラムの内容と実施状況、参加した聴講高校生の学習成果と感想等について報告を行った。また、先取り履修の被提供校8校からの制度の導入に関わるアンケートで集まった、主な意見についても説明を行った。

委員からは、試みの有効性への評価とともに、進路選択における高校時点の経験の重要性に鑑み、将来的には、より多様な生徒に対象を広げるべく助言が寄せられた。また、事業趣旨にある目的や将来構想に則して、明確なビジョンに基づく活動施策と結果説明が、評価の上で問われる等の貴重な指摘を受けた。

4 「被提供校」との連絡調整と教員研修体制の構築

(1) 被提供校への個別最適な学習環境の調整と受講支援体制について

本年度第1回の推進会議において被提供校（各附属学校）に対して、生徒のニーズに合った教材を提供校（筑波大学）と連携して検討し、個別最適な学習環境の整備を担当する分掌と担当教員を各校で決めるように要請を行った。当初、推進会議には各校の副校長に出席を求めていたが、多忙のため、実質の窓口として、別に中心となる担当教員を決めて、次の役割を担うことを申し合わせた。

- ・提供コンテンツについての検討(大学・附属学校教育局によるコンテンツ作成・提供の支援・評価)
- ・受講環境の整備（校内での位置づけの検討 ～ 教務的側面・施設の側面など）
- ・開講する授業や提供するコンテンツについての広報

さらに、第2回の推進会議終了後、各附属学校としては、どのような形で先取り履修システムを活用していきたいか、アンケートを行い、第3回の推進会議において意見の取りまとめを行った。

(2) 被提供校への「先取り履修アンケート結果」

問1「先取り履修」を、教科（通常の授業内の活動）として位置付けられる可能性はありますか。その場合、どのような方法が考えられますか。
○通常の授業科目として、そのまま実施することは難しいと考えられるが、高校で学んでいる内容の発展的学習として取り扱うことは可能ではないか。 ○例えば、「課題研究」などの一部の扱いで、能力と興味の高い生徒が授業時間外に探究学習として、「先取り履修」することは考えられる。 ○その場合、土日や長期休暇に参加する形態が考えられる。
問2「先取り履修」を、特別活動（総合的な探究の時間など）に位置付けられる可能性がありますか。その場合、どのような方法が考えられますか。
○全生徒が取り組む「総合的な探究の時間」や特別活動に、そのまま代替することはできないが、授業と重ならない時間（放課後、土日）に、調べ学習などの一環として、通常の授業に付加する形で、「先取り履修」することは可能であろう。 ○自分の研究テーマと科目の内容がマッチする生徒が、希望して履修する制度がよいのではないか。 ○また、特別支援学校の生徒などが履修する場合は、自身の身体の課題に向き合って、今後、社会で生活する上での新たな知見を得る視点で取り組むことも可能であるとする。
問3「先取り履修」を高校で進めるにあたっての要望事項をあげてください。
○生徒の興味・関心に応じて対応できるよう、様々な分野から多くの科目が開設されるとよい。また、短期間で履修できる科目の開設や、筑波大学の総合科目をオンデマンドで視聴できるとよいだろう。 ○土日や長期休暇期間など、早めに開設科目の内容・スケジュールがわかると履修しやすい。 ○高校の教育目標とのすり合わせは高校の教員が行うが、科目内容について、担当の大学教員にもアドバイスを頂けると助かる。 ○高校での評価に沿った評価方法を採用して頂けるとよい。 ○教材の提供や授業の進め方について、さまざま障害に対応した情報保障が必要である。 ○学校生活を疎かにするような、強いインセンティブ（進路活動に有利であるとか）はあまり望ましくない。 ○教育課程とは切り離して、生徒個人の活動としたほうが、個別最適学習の趣旨に適っている。

問4「先取り履修」は、2025年度開始の予定です。実施に向けた検討スケジュールをご検討いただき、お答えください。
○通常、翌年度の授業科目については、前年の夏から秋にかけて、生徒対象の履修説明会を行っているので、できれば夏休みまでに具体的な開設科目などの概要が明らかになっていることが望ましい。
問5「先取り履修」の方法として、AやB以外に考えられる方法などあればご提案ください A：長期休業中や土日開講の対面授業（筑波キャンパス） B：すべてオンラインまたはオンデマンド授業
○実現は難しいと思うが、大学教員が高校に出向いて授業したり、高校生が東京キャンパスに集まって授業を聞く方法もあると考える。そうすれば、時間割に位置づけ、全生徒が参加することが可能になり、教育課程や学校行事として位置づけることも可能になるだろう。 ○基本的にA、Bの併用でよいと思うが、レディネスを揃えるための授業を、高校側でできるとよい。 ○実際に研究室でゼミや研究に触れる機会があると、その分野に対する興味・関心を強く持たせることができるだろう。
問6「先取り履修」を進めるにあたっての要望事項やアイデアなどありましたら、お答えください。
○筑波大学が、講義や公開講座、シンポジウムなどの動画をオープンコースウェアとして広く公開して、社会に生涯教育のコンテンツを提供し、そうした知的資源への社会的な評価が高まれば、自然と全国の高校生が興味をもって集まってくるだろう。 ○先取り履修に関する筑波大学の方針や実施主体を教えてください。 ○取得した単位を筑波以外の他大学でも単位認定して欲しい。 ○スーパーサイエンスハイスクール(SSH)等の授業を、大学で実施して欲しいという学校は、多いのではないかな。
問7 大学の単位認定と高校の単位修得との関係について、考えをお答えください。
○大学の授業科目履修で取得した単位を、高校の卒業単位にすることは、高校だけでは決められず、慎重にならざるを得ない(難しい)。 ○ただし条件が揃えば、愛媛大学が実施しているように、二重単位の付与でもよいのではと考える。
問8 各校の高大接続（連携）についての基本的な考え方をまとめてください。
○研究室を訪問したり、附属学校を大学の研究フィールドとして提供したりする一般的なつながりを、拡充・発展させたい。「先取り履修」は、専門的な能力を伸ばすための1つの方法ととらえ、それが最適な生徒を見いだし、個別に働きかけたい。 ○大学での学習・研究を高校時代に経験・専修できることは重要であり、連携を進めることは賛成である。 ○高大接続単位取得者は、優先的に筑波大学に進学させるような制度があったほうがよいと考える。 ○国内に限定せず、筑波大学の海外ネットワークも駆使しながら、国を超えた高大接続ネットワークを構築したり、ヨーロッパのエラスムスプラスのように、学生、生徒、教員が相互に学び合う構造ができるとよい。 ○特別支援学校が研究のフィールドとなり、双方に有益な成果が得られることが望ましい。 ○「大学の〇〇先生の〇〇の授業を受けることができる」などまとめた案内があると、個人的に繋がりがなくても、附属学校から連絡しやすくなる。 ○今学んでいる内容が、どのように発展、活用され、自分たちの生活などに影響するかを知ることは、学習のモチベーションを上げる上でも効果がある。より具体的、発展的な内容に高校の頃から触れられることは、自身の進路を考える上でも有益である。 ○高大接続は、全ての生徒に必修で課すものではなく、各生徒がそれぞれの興味・関心・能力に応じて、取り組むものであると考える。また「先取り履修」は、進路選択の参考にするものであり、履修した分野とは異なる分野へ進学できる形であれば、多くの生徒にとって有益なものであると考える。

5 先取り履修・単位修得システムの構築

(1) 令和4年度の検討状況

昨年度（令和4年度）は、運営指導委員会・評価委員会において、国内外の大学の先取り履修・単位修得システムの情報提供を受けたほか、取組み先進校である名古屋大学教育学部附属中・高等学校を訪問し、同校主催のWWL生徒研究発表会に参加して、調査・情報収集を行った。また「令和4年度WWLコンソーシアム構築支援事業におけるEBPMに向けたデータ収集・分析、効果検証等のための調査研究」成果発表会においても、全国の大学と附属学校・連携校の間で進められている、多くの先取り履修システムの事例報告に触れ、本事業の参考指針とした。

(2) 他大学の先取り履修システム事例の調査とヒアリング結果

本年度の先取り履修システムの検討にあたって、まず本稿の「1 個別最適な学習プログラムの構成および提供コンテンツの検討ー(2) 高校生を対象とした先取り履修コンテンツの調査」で取り上げた代表的な他大学の科目等履修の事例を参考にした。提供されているコンテンツの情報以外にも、履修条件、成績評価、費用などの制度運用面において参考情報として活用できる部分が多かった。検討を進めると、早稲田大学で行っている制度が、本学の想定する先取り履修システムと共通点が多いことが分かり、本事業の担当者が実際に同大学の所管教育組織を訪問して、ヒアリングを行った。

その他、WWL連絡協議会の情報交換の中で^{そくぶん}灰聞した、先取り履修で先端的な教育活動を行っていると思われるいくつかの学校へも、リアルな情報を得るため、直接ヒアリング訪問を行った。

①早稲田大学グローバルエデュケーションセンター（令和5年6月20日）

同大のグローバルエデュケーションセンターは、新しい基礎教育の形を目指し、全学部生に対して、専門教育の基礎となるリベラルアーツ、語学、データサイエンスなどの基盤科目のほか、主専攻を補うような独自の副専攻科目を提供している。

同センターでは、平成14年度より「高校生特別聴講制度」を開設し、意欲的な高校生へ大学授業の機会を継続して提供している。受講する高校生は、先取り履修というより、早稲田への進学を目指して授業を体験してみたいと希望する生徒が多いとのことである。

1年生向けのフルオンデマンド授業科目を、JV-Campusと同様に「moodle」という世界的に普及しているオープンソースの学習管理システムを利用して管理し、主に附属校・系属校の生徒向けに提供している点など、本学が行おうとしている先取り履修システムの試みに近い。このヒアリングでは、具体的な運用方法の実状を知るよい機会となった。

また、こうしたシステムを利用したオンライン授業の履修以外の部分でも、次にあげる制度運営上の基本的な留意点を改めて確認することができた。

- ・科目等履修生の場合も、基本的には新入学生と同じく「学籍」が発生するので、入学書類と同じ基準で出願書類を提出させている。
- ・成績評価は、在學生と同じ基準で行っている。また、取得した成績評価は、早稲田に入学後に本人が単位認定の手続きを申請すれば、そのまま学部の履修成績に反映され、GPAの計算対象に

もなる。よく学習している高校生の成績は、大学生と遜色なく、最高のA+評価を取得した生徒もあり、授業終了後、年度末に履修した高校生の在籍校へ成績証明書を送付している。

各授業科目における学習支援システム（Waseda Moodle）の利用については、基本的に科目担当教員にまかされており、次のようにさまざまなケースがある。

- 1) テストやレポート提出など授業科目の学習に全面的に利用
- 2) 完全に自動採点化されている一部のオンデマンド科目で利用
- 3) 単にコンテンツの掲示のみで利用
- 4) まったく利用しない

②昭和女子大学附属昭和中学・高校（令和5年7月10日）

同校では40年も前から「五修生制度」という、他校にはない独自の科目等履修生制度を続けている。この制度を選択した生徒は、高校3年生に在籍しながら、週1回のホームルームと卒業式準備以外、実質1年前倒しで昭和女子大学の授業を受けて学生生活を始める。そして、正式に大学に進学後は、通常より1年早く大学を卒業して、残りの1年で大学院を修了するか、留学や就職に専念したり、ダブルディグリー制度を利用して、米国、オーストラリア、中国、韓国等、海外の大学の学位を合わせて取得するなど、選択肢を広げることができる。40年前の制度開始当初は6クラスのうち半分の3クラス（100名以上）の生徒が同制度を選択したとのことであるが、昨年度の制度利用者は9名とかなり少なくなっている。しかし、進学後は同大学が力を入れている留学やダブルディグリー制度などを活用することができ、新たな付加価値を生み出しているように感じられた。

また同校は他大学との高大連携も進めている。スーパーサイエンスコースや本科コースの理系志望の生徒向けに、東京農工大、東京理科大、千葉大、芝浦工大など理系の大学と連携を行っている。指定校推薦枠や大学との連携協定に関わらず、生徒から申し出があった大学については、積極的に交渉を行っているとのこと。例えば、芝浦工大との特別連携では、4日間のインターンシップとして、高校2年生が研究室で指導を受けながら実験などを手伝っている。文系志望の生徒向けにはグローバル留学コースを設けており、協力関係にあるテンプル大学日本校と連携協定を結んでいる。

同校の校長によれば、これからの高大連携は、高校生が大学の教員から直接指導を受ける形の活動が主流になるだろうとのことであった。

③産業能率大学（令和5年11月24日）

同大学でも、高大接続に伴う科目等履修の制度を行っており、「社会を動かすマーケティング」という夕方5時限目の経営学部科目を高校生に公開している。同科目では、ビジネス分野で生まれたマーケティング手法を、学校や病院、自治体、NPO、国際関係など幅広くソーシャル分野に適用して、社会課題の解決を図ることを目的としている。科目履修者約50名のうち20名が協定を結んだ高校からの生徒で、ほぼ女子とのことである。授業は5～6月の授業期間に6コマ、夏休み中の2日間を利用して8コマの計14コマを行い、高校生が履修しやすいように、配慮されている。

毎回の理論学習は数件程度にとどめ、指定された共通のビジネスケースについて、30～40分のグループワークを行う。高校1年生～大学4年生まで7学年の生徒・学生がともに学ぶことになるが、優秀な高校生の学習成果は大学生と較べても遜色なく、身近にあるソーシャルな課題を高校では学んだことないスタイルで学習することで、履修した生徒の満足度は高い。話を伺った科目担当教員によれば、大事なのは、つまみ食いではなく、深く掘り下げて学ばせることにある、とのことだった。

（３）令和５年度の先取り履修システムの検討経緯

本稿（１）で述べた昨年度の検討や（２）にある先行事例の検証をふまえて、高校生向けの科目等履修を柱とする新たな先取り履修システムの制度について本年春から夏にかけて設計を進めた。

６月に大学の授業科目運営の事務局である教育推進部と打合せを行った。同部内の所管部署は科目等履修生制度が教育機構支援課、高大連携の取組みが社会連携課、科目履修および教学事項全般の取りまとめが教育推進課と、それぞれ担当が分かれている。これら３課の課長および主務担当者に向けて、制度概要と規程案、候補科目案、他大学事例、早稲田大学へのヒアリングの結果等の資料を提示して説明を行った。この際、教育推進部側からは、高校生の科目履修者数の見込や、今後の会議スケジュールなどについて確認があった。

当初、高校生対象の科目等履修生制度案として、従来規程をベースにしつつも、他大学の関連規程なども参考にした独自の規程案を検討していた。しかし、附属学校教育局と教育推進部との間で検討を進める中で、科目の履修と単位認定に関し、確実に安定した運用体制を確保するためにも、できるだけ現行の科目等履修生制度の枠組みと既存開設科目を活用して制度を設計してゆく方向に転換していった。

こうした変更をふまえて、８月に再度、教育推進部と打合せを行い、制度概要や規程、対象科目、必要な手続き等に関して、主に次の基本方針を確認した。

- ・制度名称は「高大接続科目等履修生制度」とし、令和７年度からの制度開始を目指す。
- ・原則して、同制度の対象科目は既存の開設科目として、従来の一般を対象とした科目等履修生制度の枠組みを利用し、従来規則を最小限度、改訂することで対応する。
- ・同制度の対象校は、個別最適事業期間中は、事業における被提供校８校に限定し、安定的運用が確立された後は、順次、対象校を広げてゆく。
- ・履修を希望する生徒は、学校長推薦のもと、附属学校教育局経由で大学に出願を行う。
- ・履修科目は、基本的にオンデマンド型の実施形態の科目と夏期集中科目等から選び、一般の科目等履修生とは別に高校生向けの「開設授業科目一覧」から選択する。
- ・費用については、高校生の負担軽減を考慮して、検定料と入学料の納付は免除して、授業料を１単位 5,000 円程度で調整する。
- ・科目履修と成績評価は在学生と同じ基準で行い、筑波大学に入学した場合は、学群学則の規定に基づき単位認定を行う。

以上に基づいて、本学の方針決定に関わる端緒になる学副懇談会（令和６年１月１５日と２９日に開催）に提出した資料が次項「（４）「大学の学びの先取り履修システム」の構築について」である。また規則の改訂については、従来規程である「筑波大学科目等履修生細則」の最後にある「この法人細則に定めるもののほか、科目等履修生に関し必要な事項は、別に定める。」という条項に基づき、別途作成した「学長決定」が次項中の「筑波大学高大接続科目等履修生制度について（案）」である。本学の「学長決定」は、恒常的な規程よりも期間特例的なものとして運用される。

上記の提案事項は、本年度の学副懇談会と教学会議である学群教育会議にて承認され、さらに来年度開催される各種の法定会議でも審議され、正式決定となる。決定後、以上の方針に基づいて「大学の学びの先取り履修システム」を運用してゆく予定である。

(4) 大学の学びの先取り履修システムの構築について

①趣旨

大学の学びの先取り履修は、高校生が大学の学びに直接触れることにより高校生に各学問領域に対する興味・関心を喚起し、持続可能な国際社会の創成に向けて課題を解決する思考力を養うなど高校生の学びの充実に資するとともに、授業の活性化や将来の優秀な大学生の確保に資するものである。

附属学校教育局では、第4期中期目標・中期計画において大学の学びの先取り履修システムを構築することとしており、文部科学省の「WWL コンソーシアム構築支援事業：個別最適な学習環境の構築に向けた研究開発事業」（令和4～6年度）（以下「個別最適事業」という。）の委託を受け、JV-Campus（本学が開発した国際的オンライン教育プラットフォーム）等を活用して、関連する教育組織や関係部署と協力しながら準備を進めているところである。

大学の学びの先取り履修システムを構築するにあたっては、科目等履修生制度の枠組みを活用することとする。令和6年度中に関係規則を改正し、令和7年度から本システムの運用を目指す。

②大学の学びの先取り履修システムの概要

- 1) 本学の科目等履修生制度の枠組みを活用したシステムとし、制度名称を「高大接続科目等履修生制度」とする。
- 2) 当面は、「個別最適事業」における被提供校8校（以下「対象校」という。）^{*1}を対象として本システムを運用することとし、その運用状況を見ながら対象を拡大する^{*2}。
*1 筑波大学附属高等学校・駒場高等学校・坂戸高等学校・視覚特別支援学校高等部・聴覚特別支援学校高等部・桐が丘特別支援学校高等部、お茶の水女子大学附属高等学校、東京学芸大学附属国際中等教育学校
*2 *1以外のSGH・WWLネットワーク校（国内・国外）へ対象を広げ、さらに安定的運用が確立された後は、国内の高校やSEAMEO（東南アジア教育大臣機構）スクールネットワークに加盟している海外の高校へ対象を拡大することを想定している。
- 3) 原則として、本システムの対象科目は、既存の開設科目とする。
- 4) 本システムの利用を希望する高校生は、本学の科目等履修生として在学校の学校長から推薦を受け、各学校で取りまとめの上、附属学校教育局経由で出願する。
- 5) 高校生の負担軽減等を考慮して検定料と入学料の納付は免除する。授業料については、1単位5,000円とする。

（参考）科目等履修生(学群)の諸費用 検定料:9,800円、入学料:28,200円、授業料:14,800円/1単位

③関連規則等の制定及び改正

- 1) 筑波大学高大接続科目等履修生制度について（学長決定として制定）
- 2) 筑波大学科目等履修生等の授業料等に関する規程（一部改正）

④会議スケジュール予定

令和6年1月15日（月）	学副懇談会（方針、授業料等設定の確認）
令和6年1月16日（火）	学群教育会議（意見交換）
令和6年1月29日（月）	学副懇談会（最終案の確認）
令和6年2月13日（火）	学群教育会議（審議）
令和6年5月～7月	運営会議（事前調整） 教育研究評議会（審議） 経営協議会（審議） 役員会（審議）

⑤受入開始までの流れ

令和6年5月以降（承認後）	対象校へ制度の概要について通知
令和6年7月頃まで	対象科目の選定、募集要項等の具体的な受入について決定
令和6年10月頃	対象校の生徒に周知
令和7年1月下旬	出願受付
令和7年4月	受入開始

（参考）筑波大学高大接続科目等履修生制度について

（ 令和6年 月 日
学 長 決 定 ）

筑波大学高大接続科目等履修生制度について（案）

（目的）

第1条 この決定は、附属学校教育局を事業主として採択された文部科学省の「WWL コンソーシアム構築支援事業 個別最適な学習環境の構築に向けた研究開発事業」の一環として、同事業で連携する高等学校（以下「連携校」という。）の生徒を筑波大学の科目等履修生（以下「高大接続科目等履修生」という。）として受け入れ、筑波大学で開設している科目を提供するため、筑波大学科目等履修生細則（平成17年法人細則第24号。以下「科目等履修生細則」という。）第17条及び筑波大学科目等履修生等の授業料等に関する規程（平成17年法人規程第34号。）第11条に基づき、必要な事項を定めることを目的とする。

（入学の時期）

第2条 高大接続科目等履修生の入学の時期は、学年又は学期の始めとする。

（出願資格）

第3条 高大接続科目等履修生として出願できる者は、連携校のいずれかに在学する生徒で、学校長が推薦する者とする。

（出願方法）

第4条 高大接続科目等履修生となることを志願する者（以下、「志願者」という。）は、学長に願い出るものとする。

2 その他、必要な手続きは別に定める。

（履修申請科目）

第5条 志願者が履修申請できる科目は学群生を対象とする授業科目に限るものとし、原則、筑波大学があらかじめ提示する授業科目から選択するものとする。

(選考方法、選考手続及び選考委員会の設置(以下「選考方法等」という。))

第6条 志願者の選考方法等については、科目等履修生細則第5、6条及び7条に準じる。

(合否決定等)

第7条 学長は、科目等履修生細則第6条第3項に規定する学群長の報告に基づき合否を決定し、附属学校教育局を経て、その結果を志願者に通知する。

(検定料、入学料及び授業料)

第8条 高大接続科目等履修生に係る検定料及び入学料は不徴収とする。

2 授業料は、1単位5,000円とする。

(入学手続及び入学許可)

第9条 第7条の合格の通知を受けた者であって高大接続科目等履修生として入学を希望するものは、所定の期日までに、前条第2項に規定する授業料を納付し、かつ、別に定める書類を学長に提出しなければならない。

2 学長は、前項の入学手続を完了した者に入学を許可する。

(履修期間)

第10条 履修期間は、入学を許可された年度内とする。

(履修科目の制限)

第11条 学群長は、必要があるときは、授業科目の履修を制限することができる。

(証明書の交付)

第12条 高大接続科目等履修生の修得単位、在籍期間等については、本人の請求により、証明書を交付する。

(高大接続科目等履修生の所属の取扱い)

第13条 高大接続科目等履修生の所属の取扱いは、科目等履修生細則第13条に準じる。

(授業科目の履修方法等)

第14条 高大接続科目等履修生に係る授業科目の履修方法及び単位の認定その他履修に関し必要な事項は、筑波大学の学生の例による。

(法人規則等の遵守)

第15条 高大接続科目等履修生は、法人の法人規則等(次条において「法人規則等」という。)を遵守しなければならない。

(その他)

第16条 高大接続科目等履修生については、この決定に定めるもののほか、必要な事項について

は、学群学則その他法人規則等の規定を準用する。

附 記

(施行期日)

- 1 この決定は、令和6年 月 日から実施する。